

Title	ケンブリッジ綱領(一六四八年)
Author(s)	松谷, 好明 訳
Citation	聖学院大学総合研究所, No.32, 2005.3 : 363-416
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4282
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ケンブリッジ綱領（二六四八年）

松谷好明 訳

本翻訳について

一六四八年八月一五日マサチューセッツ植民地総会は、ケンブリッジにシノッド（教会会議）を招集した。このシノッドは、その後一〇〇年間にわたりニューイングランドの会衆派教会政治（統治）を規定することになった、いわゆるケンブリッジ綱領（Cambridge Platform）を作成した。序文の執筆者はジョン・コトン、本文の執筆者はリチャード・メイザー（マザー）である。本翻訳の底本は、Wliston Walker, *The Creeds and Platforms of Congregationalism*, New York, Pilgrim Press, 1991. (Originally published in 1893) である。

序文

諸教会の公的信仰告白を公表することには二重の目的があり、いずれも人々を建て上げるのに資するものである。第

一に、信仰をそれ自体において純粹に維持することであり、第二は、諸教会の間で、および諸教会との、一致と調和を提示することである。当地の我らの諸教会は、(キリストの恵みにより)福音の真理について同じ教理——これは、ヨーロッパの改革されたキリストの全教会で広く受け入れられているものである——を信じ、告白しているが、それだけでなく我らは、特に、我らの祖国の諸教会により提示されている信仰と真理の教理から異ならないことを願っている。それというのも、我らすべてを一つの思いになしうるのは一つの祖国ではなく、また、我らは、我らの主イエスに対する輝かしい信仰を人々に対する敬意と同列に置くべきではないからである。しかし、自分自身ユダヤ人であつたパウロが、生まれながらユダヤ人であつた自分の敬虔な同胞がなしていることを知つてゐるところに従つて、信仰による義認と死者の中からの復活の教理を提示すると告白したように(ガラ2・15、使徒16・6、7)、生まれながらにイギリス人である我らは、イングランドの諸教会によつて抱かれていますのを我らが見て知つてゐると同じ宗教の教理(特に根本的な事項において)を、福音の真理に従い、提示したいと願うものである。

我らが、教会統治の問題における我らの敬虔な兄弟たちと同胞の、不親切で、兄弟にふさわしくなく、キリスト者らしくもない争いを知れば知るほど(我らは確かにそうしており、また、不断の嘆きとおのきをもつてそうする理由がある)、我らは、彼らが一つの共通の信仰で一緒にまとまり、また我ら自身が彼らと一緒にゐるのを見たいと一層熱心に、願うものである。この目的のために、ウェストミンスターに会した神学者たちの尊い會議により合意された公的な信仰告白「ウェストミンスター信仰告白」を精査し、その全体と内容が(教理の点で)彼ら自身の判断のみならず、我らの判断をも表明していることを知り、また、我らの間で常に教えられ、広く告白されている信仰の公的な告白を起草するよう、我らの敬虔な為政者たちから同じように要請されたので、我らは、宗教的かつ榮譽あるイングランド議會に対して尊敬すべき會議「ウェストミンスター神学者會議」が提出したその信仰告白全体(教理の実質の点で)に対する我らの、公然たる、心からの同意と立証を、為政者に対し、また、彼らと共に我らの教会に対し、更に、彼らと共に、

海外のすべてのキリスト教会に対して、提出することがよいと考えた。但し、教会規律について論争点となつてゐるところに關係する、彼らの信仰告白の二五章、三〇章、三一章、の幾つかの節だけは除く。それらの箇所については、我らは、以下の論文において教会規律の草案に言及する。

ここに我らが言明する事柄の真理性は、一六四八年六月末、ケンブリッジに会した我らの諸教会の長老と代表たちから成るシノッドの全員一致の票決から明らかとなる。それは、以下の言葉づかいで一緒に通過した。「本シノッドは、イングランドにおいて尊敬すべき會議により最近公刊された信仰告白を（深い心の喜びと神への感謝をもつて）精査し、検討した結果、それは、信仰の全事項において非常に清く、正統的で賢明であると判断し、それゆえに、その實質について、進んで心からその信仰告白に同意する。ただ、教会統治と規律にかかわることについては、我らは、本會議により合意された教会規律の綱領に我ら自身を委ねる。それゆえ我らは、この信仰告白「ウェストミンスター信仰告白」が、我らの間にある諸キリスト教会と尊敬すべき最高法廷に対して、彼らのしかるべき検討と受け入れに値するものとして推賞されることがふさわしいと考える。」にもかからわず、我らは、一〇章一節に表明され、一三章一節で要約的に繰り返されている召命 (vocation) の教理が、幾らか、議論なしで通過したのではなかったことを隠すことはできない。召命という用語、および、それを描く他のいろいろな用語は、大きな、あるいは、より厳密な意味、用法も可能であること、また、まさに順序ないし方法の点で理解を拘束することが意図されているわけではないこと、などを考えて、それへの全体的な同意が存在してきたのである。

今、宗教の教理条項すべてにおいて我らが彼らに同意し、進んで賛成することをこのように公に告白することにより、我らは、我らが彼らと同じ民族の民の残りの者であるだけでなく、また、共通の同じ信仰を告白する者であり、共通の同じ救いを共に受け嗣ぐ者であることが、全世界に明らかになることを期待している。その上、更に、彼らと共に同じ信仰を我らがこのように告白することは、我らを異端の嫌疑から免れさせる（彼らの判断によつてさえ）だけでな

く、また、分裂 (schism) の嫌疑からも同じようにして免れさせるであろう (と我々は信じている)。我らは、教会規律の問題で彼らと意見を異にせざるをえないが、しかし、我らの異議申し立ては、我ら自身の内の傲慢な精神からなされているのではなく、(彼らも、我らが進んで彼らから学ぼうとしていることを知っている)、また、彼らに対する愛のないあら探しの姿勢で行われているのでもなく (その両者こそ、分裂の本来的、本質的特徴である)、むしろ、彼らがキリストに従っているかぎり、我らも彼らと共に歩み、彼らに従う、柔和な知恵からである。従つて、キリストの御旨について (教会の秩序にかかわる若干の点についてだが) 我らが異なる理解を持つ場合も、我らはなお、彼らに対してふさわしい敬意を保ち (我らは、彼らがキリストを通して両国の輝かしい光であると判断する)、そして、ただ、小羊がいずこに行かれようと彼に従う (我らは霊においてそうすべきである) 許可を願ひ求めるのみであり、(使徒たちの模範に倣い) 我らは信じているゆえに、また、そのように語るのである。

それで、もし我ら自身のような貧しき寄るべき者の例が、イングランドの我らの兄弟の全員ではなくとも (それは望むには大きすぎる祝福であろう)、彼らの一部の人を説得し、彼らが、彼らとは意見の異なる人々と同じことを考え、語るまでに至るならば、我らはキリストにあつて望むのだが、それは、選び抜かれた聖徒たちの中に見られる判断の相違の際、お互いを苛酷に裁き非難することを和らげるだけでなく、両国における全教会の不和と破壊の危険を (キリストの憐れみにより) 予防するであろう。そうではなく、もし兄弟たちが互いにかみ合い、共食ひし続けるなら、使徒「パウロ」は、それが彼らを、そして我らすべてを滅ぼすことになることを恐れている「ガラテヤ 5・15」(我らも、悲しい気持でそう恐れている)。主がそれを防いでくださいますように。

我らは、我らの教会統治の方法に対して、(異端だ、分裂だという上述のような中傷に加えて) 他のいろいろな反対が出されていることを知らないわけではない。しかし、それは薄弱な (我らの考えでは) 根拠に基づいてである。

反対論(1) 聖徒と呼ばれる者以外はだれも我らの教会の交わりに入れないことにより、我らは、多くの教会区パリッシュ教会からその最良の会員を奪つて、我らの集会の一つを造り上げている。これは、ただ単に、教会の中から教会を集めること(聖書では聞いたこともないこと)であるばかりか、その最良の聴衆を奪うことによつて、教会区の最良の牧師たちの心と手を弱めることもある。

反対論(2) 我らは、無知で誤りに陥っている、スキャンダルのある人々を獲得し、招き入れる手立ては何も設けず、そうした人々を我らの教会の中に受け入れることを拒み、かくして、人を健全にする教会規律の治め策から排除する。

反対論(3) 我らのやり方で、我らは、どの家族の中にも分裂と建て上げ妨害の種を蒔いている。すなわち、我らの教会には有志(voluntaries)のみを受け入れているから、夫と妻、親たちと子供たち、主人と使用人たちが、それぞれ別の教会に属することが起こる。そして、親たちと主人たちが彼らの子供たちと使用人たちと別の教会に属するため、彼らは、子供たちと使用人たちが説教から益を受けるように正しい配慮をすることができず、そのみならず、こうすることによつて夫、親、主人たちは、自分たち自身のもの以外に、多くの他の教会と教会役員の経済的負担の責任を負うことになり、それはとても担いきれない責任と負担となる。

反対論(1) への回答 教会の中から教会を集めることについて、これは聖書では聞いたことがないことである、と我らは言えない。最初のキリスト教会は、ユダヤ教の教会から、そしてその教会の多くの会堂から集められ、一部はエルサレムの住民から、一部はガリラヤ人から成っていた。彼らは、公的礼拝の幾つかの部分では神殿と幾分交わりを保つたが、しかし犠牲をしばしばささげたり、自分たちの教会の事柄を決定するのにサンヘドリンに頼つたりはせず、福

音の全規定において使徒たちの教会と全面的で絶え間ない交わりを保った。そして、アンティオキアの最初の異邦人教会について言えば、それは、一部はエルサレム教会の散らされた兄弟たち（そのうちのある人たちは、キプロス、クレネの人々だった）、一部は信仰を持った異邦人たちから集められ、彼らから成っていた（使徒11・20、21）。

もし、エルサレムの最初の教会とアンティオキアの最初のキリスト教会は、キリスト教会からではなく、程なくして廃止される運命だったユダヤ教の神殿と会堂から集められたのであり、彼らがアンティオキアに集まったのは、迫害時に離散したときであつた、と言われるなら、

我らとしては、以下の点を考えてもらいたいと思う。

①ユダヤ教会の会員たちは、キリスト教の教会区教会の会員たちが彼らの教会区教会と交流を保つように縛られる習慣であるのと比べて、ユダヤ教会が廃止されるまではそれと交流を保つべく、明白な清い契約により一段と強く、びつたりと縛られていた。主教制の《教会法令》(canons)は、教会区教会の会員たちを自分たちの教会区教会に出席するよう義務づけているが、その教会法令は今や、主教制と共に廃止されている。国のコモン・ローは、彼ら自身の教会区内にあるものでなくとも、とにかくどこかほかの教会の神礼拝に出席すれば、満たされる（と我らは考える）。しかしユダヤ人たちに彼らの神殿と会堂における神礼拝に出席することを義務づけていたのと同じ神の契約や、あるいは何か他の宗教的絆があつて、彼らに自分自身の教会区教会における神礼拝に出席するよう義務づけるということはない。

②エルサレムにあつたユダヤ教の神殿教会は廃止される運命であつたが、しかし、そのことは、実際にそれが廃止されるまでは、その会員たちが神殿教会を放棄することを合法的にはしない。将来の廃止は現在の放棄を何ら承認するものではない。但し、ある場合には、教会が現在まだ立っているのに、それを放棄することが合法的になる。すなわち、現在のさまざまな汚れを避けるためか、もしくは、より一層の教会が望んでかであり、従つて、そのいずれかの

点で良心をより一層満足させるためである。将来の出来事（あるいはその見通し）は、現在の関係を解消しない。さもなくば、妻、子、使用人たちは、彼らの夫、親、主人が死ぬほど重い病気になる時、彼らを見捨ててよいことになるう。

③ユダヤ教会の会員たちが、迫害時にアンティオキアの教会に加わるときにしたことは、いかなるキリスト教会に属する会員たちも、良心を満足させるために、同じことをすると考えた方がよいだろう。良心の平和は、外なる人の平和よりももっと願わしい。そして、良心のとがめからの自由は、誠実な心にとって、迫害からの自由よりも一層心地よい。

もし、アンティオキアの教会に加わった、エルサレムのキリスト教会の会員たちは、彼らの関係者たちと一緒に彼らの住居を移したのであり、もし、会衆主義のやり方の兄弟たちがそれをしようとするなら、彼らが彼らの長老主義教会から離れるという苦情を大幅に減らすであろう、と言われるなら、

我らは、教会との関係の変更の場合、彼らがそのようにして同様の住居の移転を（もし、彼らの財産をあまりにも損うことなしに可能であれば）積極的に支持してくれることを、心から望むものであり、我らは自分たちの方では実際そのようになしてきた。しかし、そのような場合、住居の移転が必要不可欠であると言うことは社会的に一緒に住むことを、正式な理由にはないとしても、しかし少なくとも、教会との関係に正当に付随するものとする、腐敗した原理を作り出し、大事にすることであり、福音の真理はそのようなことを承認しない。今や福音の真理を損うような誤りを作り出すことは、パウロが判断しているように、福音の真理に従って正しい歩みをしていないことである（ガラテヤ2・14）。

④我らは、長老制教会の会員が自らの教会との関係を直ちに放棄して、会衆制教会の交わりに赴くことは、たとえその人が自分自身の教会の状態や統治に何らかの欠点を認めるとしても、適切な、あるいは、健全なことだとは思わ

ない。

なぜなら、第一に、教会関係における兄弟愛の誠実さという点から、教会の会員たちは、自分たちの兄弟たちから別れる前に、まず彼らの罪深い欠点を彼らに説得し、彼らの改革を十分に待つことが求められるからである。というのも、もし我らが、一個の兄弟の回復をはかるにも兄弟愛をもつて、非常に柔和に、忍耐をもつてしなければならぬとすれば、一つの教会全体に対してはどれほど多く、同じような優しさをもつて歩むべきかは自明である。

また、第二に、欠けのある教会から健全な会員たちが性急に離れることにより、改革は推進されるどころか、度々停滞させられ、腐敗は増大させられるからである。反対に、純粹な改革を求めているまじめな教会員たちが一緒に留まる場合には、彼らは（彼らの誠実な努力に対する神の祝福により）、改革に向けて、彼らの長老たち、および隣人たちを説き伏せることができ、そうしたことが進めば、彼ら自身の教会で長老たちは、目に見える聖徒以外にはだれもし^{しる}「聖礼典」に受け入れず、クラシスでは他の教会の会員たちについて一切權威的裁定は下さず（相談に応じる場合だけは除き）、自分たち自身の教会についても、その教会の同意（少なくとも沈黙の同意）がなければ權威的な決定は下さない、という具合になるであろう。これら二つにことを、もし彼らが謙虚で、柔和な、清い、誠実な努力をもつて手に入れることができれば、彼らは彼ら自身の長老制教会との関係をためらうことなく継続する、良心の自由を（キリストの恵みにより）見いだすことができるであろうと、我らは考える。

⑤しかし、教会の中から教会を集めることについて、更にもう一言加えれば、聖書の中にそのようなことの明白な例が仮に存在しないとしたどうなるか。我らが幼児洗礼反対論者に対して答えるのを常としていることが、この点でも十分であろう。すなわち、その何らかの証拠が、聖書からの正当な帰結から集められれば、それで十分だということである。この事例についてのエイムズ博士「William Ames」の判断は、異論なく通る（恐らくは）が、それを彼は『良心について』（De Conscientia, Amsterdam, 1635）の第4巻、問い3への答えの中で述べた。

もし、だれであれ（彼が言うには）、不当に煩わされていたり、自分自身の建て上げのために備えをしたり、あるいは、罪に反対である証しとして、いろいろな悪が寛容に見られている教会から離れ、より純粋な別の教会に、自分が離れる教会を非難することはせずに、加わるならば、それゆえにその人は、分裂主義者（*schismatic*）として、あるいは、何か他の罪があると考えられてはならない。賢明なる博士が述べている三部命題（三重の分離）（*the Tripartite disjunction*）は、次のような場合に、教会員が自分の教会から離れることの合法性を明言する。すなわち、不当に煩わされるのに疲れてか、自分自身の建て上げのために備える方法としてか、あるいは、罪に反対である証しとしてか、のいずれかで、より改革されている別の集会に加わる場合である。たとえこれら全部が一緒に起こらなくても、このどれかがあれば、離れる正当で合法的な理由になると博士は判断する。このようなやり方は、教会区の最良の牧師たちから、彼らの最良の聞き手を奪うことにならないであろう。

なぜなら、第一に、時々、牧師たち自身が、このような改革の仕方に、比較的良好の方の彼らの聞き手と共に進んで加わるからである。こういう場合、牧師たちと彼らの聞き手たちは、なお、彼らの教会関係を一緒に続け、その上、たとえ牧師たちは教会区全体に対してこれまで通りの説教をなお続けるにしても、明白な、更新された契約により、一層きつく、強く彼らの教会関係を確かにする。

第二に、牧師たちが、他の点では（そうでなければ）最良の教会員に数える人々のやり方を嫌い、かくしてそのやり方に彼らに加わることを拒むならば、しかし、もし、それらの教会員が彼ら自身のやり方で彼らに加わってくれる他の牧師たちを確保でき、なお同じ町に一緒に住み続けることができるならば、彼らは、自分たちの以前の教会のミニストリーに絶えず出席できるように、公的集会の時間を容易に定めることができる。そうすれば、教会区の公的集会の後か前に、彼らは、自分たちの間で、聖礼典、譴責、その他の教会の規定を執行するために、共に集まる機会を持つことができる。最初の使徒的教会は、神殿の開かれた境内でユダヤ教の教会と一緒に御言葉を聞くために集まっ

たが、後には、パン割りや他の教会の規程 (order) の行為のために、家々で集まった。

第三に、長老制教会が彼らの最も賜物豊かな会員の一部を、もう一つ別の教会の設立と会員集めのために移すと仮定しよう。そうすることは直ちに彼らの損害とはならず、むしろ、彼らの拡大となる可能性がある。自分と同類のものを普及し増殖することは、生ける被造物の最も気高くて完全な仕事であり（自然と恵みの両方において）、キリストの御業を国内においても、同様に国外においても押し進めることは、キリストの誠実な花嫁の名誉である。雅歌 8・8-9 「わたしたちの妹は幼くて、乳房はまだない。この妹が求愛されたら、どうすればよいのか。この子が城壁ならば、その上に銀の柵をめぐらし、この子が扉ならば、レバノン杉の板で覆うことにしよう。」の教会は、彼女の幼い妹教会を助けるため、自分が選んでいた材料、杉の梁さえも、また、銀の宮殿を建てるのにふさわしいような貴重な自然石も喜んで手離そうとしていた。同じく雅歌 4・12-13 「わたしの妹、花嫁は、閉ざされた園。閉ざされた園、封じられた泉。ほとりには、みごとに実を結ぶざくろの森、ナルドやコフェルの花房」で教会は、園や果樹園になぞらえられている。だれ一人園や果樹園を作らず、その隣人たちの最上質のハーブや草木を手に入れることを求めると、隣人たちは無償でそれらを分けてくれる。隣人たちはそれを自分たちの園や果樹園を損うことは取らず、むしろ栄光と取るのである。しかしながら、我らはそれほどまでは行かない。我らは、教会区の上質の教会員をほしがることも求めることもせず、ただ提供されたときにその人たちを受け入れるだけだからである。

もし、彼らが提供されるのは、牧師たちによっても教会区教区（彼らへの最大の権利を有する）によってもなく、ただ彼ら自身によつてである、と言われるなら、

牧師であれ教会区教会で、彼らに対して一体いかなる権利、あるいは、いかなる権能を持っているのか、と正当に尋ねることができる。厳肅な教会契約によつてではない。なぜなら、それは、最も固い約束ではあつても、認められずに拒絶されるからである。もしそうであれば、ある牧師が最初に赴任するにあたり、彼らがそのような集会に彼を

招き、選ぶことに教会区と一緒に加わることに、そのような約束には実際正當な重みがある。我らはまた、そのような人がかかる牧師から離れることは、その牧師に當然の満足を正當に与えるような根拠に基づくのでなければ、健全であるとは判断しない。しかし、もし、教会区教会およびそのミニストリーへのそのような教会員たちの結び付きが、ただその教会区の区域内と一緒に住んでいるということによるだけであれば、そのような結び付きは人間の法に基づいていただけであるから、同じように人間の法により、容易に解くことができる。あるいは、そうではなく、もしある人が自分の住まいを移すならば、彼は自分の関係の絆と、違反の根拠も移し、除くのである。

第四に、最良の牧師たちの最良の聞き手たちが全員、否、彼らのほとんどでも、教会統治の点で彼らから離れるなど、恐れる必要はない。自分たちの回心や建て上げのために、キリストの御霊の臨在と力が自分たちの牧師たちの中に生きていることをひとたび知った人々は、教会秩序の自由を求めて、そのような信仰のミニストリーを変更することはなかなかしないだろう。そうした根拠や他の類似の根拠に基づいて、会衆主義的な同盟 (confederation) にまきつて、自分たちの牧師たちとの関係(たとえ長老制のやり方であっても)をむしろ選んでいる、また選ぶであろう、さまざまな敬虔で賢明な聞き手が、イングランドの多くの教会区に疑いもなく存在する。

第五に、しかし、諸教会区的最良の牧師たちの最良の聞き手の全員もしくは大半が、自分たちの判断で会衆主義のやり方をむしろ選んで彼らを万一離れる場合、それでも、会衆主義のやり方がキリストからのものであることが明らかになれば、自分たちの聞き手がキリストに従っていくことは、敬虔な牧師たちの清い心を悲しませることは決してないであろう。のみならず、少なからぬ牧師たち自ら(十分に考えた末)進んで彼らと一緒に行くであろう。自分の最良の弟子たちがキリストに従っていくために自分から離れたことは、洗礼者ヨハネを悲しませも悩ませもしなかった(ヨハネ3章)。しかし、会衆主義のやり方が、キリストの制定したもの(我らがそう取っているように)ではなく、人々が作り上げたものであることが万一明らかになれば、そのときは疑いもなく、長老制の形態(それが神

からのものであれば)が、モーセの杖がエジプト人の杖を飲みほしたように「出エジプト7・12」、他方「会衆派」を飲み込むであろう。これはまた、反対している双方のグループに、自分たちで立場を転換して、お互いに取り代えるようにすることを必須のこととして押し付けることもしない。そうではなく、ただ、それは、彼らに、《愛にあつて真理を求め、真理に従うこと》、それぞれ忠実に自分自身の群れの世話をする、自分の群れに神の清いものすべてと、ふさわしいときに相応の食物を与えること、そして、他の人たちについて、彼らを静かに忍びゆるし、しかし、反対の考えの人々は柔和さをもつて教え導くこと、かくして、御自身のために御自身の真理を啓示すること(あらゆる良き手段を用いて)をキリストに委ね、それまでの間、平和の絆で御霊による一致を保つように努めること、を要求するであろう。フィリピ3・15、16、エフェソ4・3。

反対論(2)、すなわち、我らが、無知で、誤りに陥っている、スキヤンダルとなつてゐる人々を捕らえ、いやし、招き入れることをせず、そういう人々を我らの教会の中に受け入れることを拒み、かくして彼らを教会の規律という治め策から排除する、ということに対して。

我らは、そういう人々を我らの教会の中に受け入れることは、彼らを捕らえ、いやすよりも、むしろ、我らの教会を失い、墮敗させると考える。ひとかたまりの粉に少しのパン種を混ぜると、かたまり全体がパン種の力を減らすよりも、かたまり全体を膨らませる「マタイ13・33以下、15・5以下」。それゆえ、我らは、ごつごつし、きちんと切つていない石は、建物「教会」に組み込まれる前に四角にする方が、建物の中でこぼこになっているところをたたいたり、切つたりするよりも安全だと思ふ。

従つて、我らは、かかる無知であり、スキヤンダルとなつてゐる人々を捕らえ、招き入れるのに、二つの手段を用いる。①御言葉の公的なミニストーリー。彼らはそれに出席するよう、勧めによつて招かれ、有益な法によつて求められ

る。魂を招き、獲得するのは、救いに至る神の力たる御言葉である。②教会の長老たちや他の有能な兄弟たちによる私的な話し合いと説得。無知であり、スキャンダルとなっている人々は、自分たち自身あるいは自分たちの子供たちのために、教会の交わりを享受し、あるいは聖礼典「洗礼、主の晩餐」にあずかる望みがないときに、より一層敬意をもって彼らに耳を傾け、その人たちの判断が健全で正統的であると認め、彼らの生活はある程度敬虔なふるまいをする望みがもてるようにされる。このような事例の場合、古典的な戒規、すなわち陪餐停止自体は、これ以上何ができるであろうか。

第三の反対論は、家庭における三重の不都合が起こるとするが、その一つ一つは避けることが適切なものである。すなわち、①家族の中で、どの関係にも不一致が起こる。②家族を治める者たちが、彼らの子供たちと使用人たちによって耳にされる事柄に心を配る機会がないため、建て上げが望めない。③彼らの家族のそれぞれの人が加わっている、それぞれの教会に対して経済的負担を果たさなければならない。

以上のような不都合はすべて、会衆制教会では起こらないか、容易に取り除かれるか、のいずれかである。なぜなら、家族関係がきちんとなつていことがよい証しにより承認されている人々以外にはだれも、会衆制教会にきちんと加入を認められることはないからである。あるいは、もし万一そうでない人々が忍び込むとすれば、彼らは、キリストの方法により、きちんといやされるか、ふさわしく除かれるか、のいずれかである。また彼らは、教会の長老たちと兄弟たちの前で、また、彼らの親たちや主人たちに対してははるかに一層、諸規定「説教、聖礼典、祈り、等々」により彼らが益を受けているということをよく説明する何か文書を提出できなければ、加入は認められない。大学の敬虔な教師は、彼らの生徒たちについて説明ができ、市中の敬虔な家長たちは、彼らの子供たちと使用人たちについて彼らが、それぞれの教会で聞いた御言葉からどのように益を受けているか、また、そのような種々の働きにより、家族全体がよ

り一層教会されていることを、説明できる。

蜜蜂は、一箇所のお花畑に制限されず、多くのお花畑に飛んでいけるときに、より多くの蜜とろうを巣箱の中に運び入れることができる。

また、彼らが個人的な財産や収入があり、それによって、彼らが持たないものからでなく、持てるものから献げることができようになっていれば、会衆制教会の維持のために、妻たち、子供たち、あるいは使用人たちから負担金が期待されることはない。神は犠牲のための強奪を受け入れたまわらない。そして、敬虔な家長は、自分の妻、子供たち、あるいは使用人たちが関係を持つている教会に貢献しなければならぬと良心において正しく感じているとしても、しかし、そのことは、もし彼らが彼自身がかわっている教会の会員として受け入れられた場合以上に、彼の負担の重荷を加重することはない。

しかし、何ゆえ我らは、例外中の例外をかくも長く弁護し続けるのか。会衆制のやり方や長老制のやり方に見いだされるよりも大きな、教会統治における大罪に、以前我らがすべて追従していたことに對して、主の御前に自らをさばき、恥ずるように、主がその忠実な僕たち（長老制の者たちであれ、会衆制の者たちであれ）を助けたまわんことを。そして、その時、確かに、主は御自身の御心を我らに明らかにし、かくして我らに一つの考え方、一つのやり方を取らせるようにされる（エゼキエル43・10、11）か、さもなければ、我らが互いの重荷を柔和な精神で負うことを学ぶであらう。そのとき、我らは、疑いもなく、次のようなことは決してしない。すなわち、キリストの訓練は誓って重んじつつ、キリストの弟子たちはいみ嫌ひ、キリストの縫い目のない衣のために戦いつつ、キリストの生ける肢体は十字架に付け、教会の交わりについて分立して、さまざま不和により、裂け目を大きく開いて、反キリスト的で冒流的な悪が教会とこの世の国家の両方を飲み込んでしまうようにすることである。

これ以上、我らは何を言うべきか。教会秩序についての相違は、国内におけるあらゆる無秩序の取り入れ口になって

いるのであろうか。主は實際我らを心のかたくなさにまかせてしまわれたため、教会統治はシオンにとつて異^わなり（ときどきモーセがエジプトに対してそうであつたように、出エジプト10・7）、主が破壊されるまでそれについて競い、争うことを止めることができないのであろうか。主イエスは、自らの教会のために自らのさまざまな苦難をささげ、また、彼の父に対してそうされたとき、この世にいる我らのためになした熱心かつ唯一の祈りを、我らが皆彼にあつて一つになることとされたのではなかつたか（ヨハネ17・20・23）。そして、主イエス（父は常に彼の言うことを聞かれた、ヨハネ11・42）が、この最後の最も厳肅な祈りを聞いて、受け入れてもらえない、ということがありうるであらうか。あるいは、他のところの全聖徒のためには主の祈りが受け入れられたが、イングランドの聖徒のためには受け入れられず、そのために彼らの間で不一致が教会の一致と交わりについてさえ大きくなっている、ということであらうか。もし、小さな信仰（からし種一つほどの）が山を取り除くことができるなら、国内の敬虔な者らすべての内に見いだされるような強固な信仰が、嫉妬によるさまざまな偶像を取り除き、兄弟たちの間で兄弟愛が自由に行き交うことを妨げる障害物を道からどけることはできないであらうか。国民的契約が双方の側に、反キリストの階層制と、更にそれ以上に、すべての神聖冒瀆と異端、いまわしい誤謬の完全な根絶に誠実に努力することを正しく義務づけている、というのはまことにその通りである。確かに、もし会衆制の規律が人々が作り上げたものとは別のものではあれば、ましてサタンのだまし惑わすものとは別のものではないか。キリストはベリアルと、光は闇と、真理は誤謬と一体どんな関係があるだろうか。忠実なユダヤ人は、神の神殿を再建するのにサマリア人の援助を必要としない。しかし、彼らはサマリア人から援助を申し出られたとき、それを断つた（エズラ4・1・3）。そして、もし会衆制の道が真理の道であれば（我らが信じているように）、そして、その道を歩んでいる兄弟たちが真理に熱心で、あらゆる偽りの道を憎むなら（彼らが彼らの聖なる規律の規範によつて教えられているように、Ⅱヨハネ10・11）そのとき、真に、会衆制教会や彼らの道を拒否することを契約派の人々に義務づける項目は、国民契約（the national covenant）の中に存在しない。会衆制の道が

ふさわしく執行されれば、一層広く、公的に受け入れられ、認められている、もう一方の規律の道「長老制」と同じほど効果的に、反キリストの階層制と、あらゆる神聖冒瀆、異端、有害な誤謬を確かに根絶する。

しかし、主イエスが、我らの心すべてと密かにお語りくださいますように。そして、自らの教会の王にいます主イエスが、我らの魂の中で彼の王としての権能を行使することをよしとしたまい、かくして彼の御国が純潔と平和のうちに我らの教会の中に到来しますように。アーメン。アーメン。

第1章 教会統治の形態について——神の言葉に規定されている、不変的なもの

[1] 教会的統治組織(polity)、教会統治、あるいは規律とは、地上のキリストの教会において、その構成と、そこにおいて果たされるべきすべての働きの両方のために、遵守するべき形態と秩序以外の何ものでもない(エゼキエル 43・11、コロサイ 2・5、1テモテ 3・15)。

2. 教会統治は、統治の部分自体と、統治に必要な環境条件(circumstances)という二重の観点から考察される。統治の部分は、御言葉の中に規定されている。というのは、主イエス・キリスト、彼の教会の王にして律法授与者、は、旧約聖書においてイスラエルの子らに一つの統治方式、型を主から届けたモーセに負けず劣らず、神の家で忠実であられる。そして聖書は、今やまた、神の人を完全にし、あらゆるよいわざに完全に備えられた者にする事ができるほどに完全であり、それゆえに、明らかに、神の家をよく整えることができる(ヘブライ 3・5、6、出エジプト 25・40、II テモテ 3・16)。

3. 教会統治の部分は、すべて神の言葉の中に正確に述べられており、第二戒に従って制定された礼拝の部分ないし手

段であつて、それゆえに、我らの主イエス・キリストが、揺り動かされることのない御国として現れ、御国を神、更に父に渡すときまで、同一であり続けるべきものである（Ⅰテモテ3・15、歴代上15・13、出エジプト20・4、Ⅰテモテ6・13、16、ヘブライ12・27、28、Ⅰコリント15・22）。従つて、それは、付け加えたり、その中にあるものを少しでも減じたり、変更したりすることは、人々、役員、教会、あるいは、この世のあらゆる国家の権能にもゆだねられていない（申命12・32、エゼキエル43・8、列王上12・31〜33）。

4. 秩序と作法に属する、時間と場所、等々といった必要な環境条件は、人々が自分たちの口実をたてに、自分たち自身の作り出したものを教会に押しつけることができるほどに人々にゆだねられてはいない（列王上12・28、29、イザヤ29・13、コロサイ2・22、23、使徒15・28）。御言葉においては多くの全般的な制限で囲まれているが——そこでは礼拝自体でも、礼拝から切り離せる条件でもない事柄について定められていて、それらの目的の点では、それらは建て上げのためになされなければならない、礼儀作法の点では、事柄自体の性質と、この世と教会の慣習に従い、作法にのっとり、秩序をもつてなされなければならない——しかし、自然自体でさえもあなたに教えないであらうか。しかし、それらは、ある程度、特別に決定されている。すなわち、あらゆる条件が考えられたのち、教化のために最も都合がよい仕方になされるべきであり、従つて、もし彼らの決定について人間の誤りがなければ、彼らの決定は神的なものであるかのように考えられるべきであるということである（Ⅰコリント14・26、40、11・14、16、14・12、19、使徒15・28）。

第2章 全体的に普遍的教会の、そして、特に、各個の、目に見える教会の、本質について

[1] ^{カトリック}普遍的教会は、選ばれ、時至つて、罪と死の状態からイエス・キリストにある恵みと救いの状態へと有効に召命

される人々の全体である（エフェソ 1・22、5・25、26、30、ヘブライ 12・23）。

2. この教会は、勝利の教会か戦闘の教会かの、いずれかである。勝利の教会とは、天において既に栄光を与えられている者たちであり、戦闘の教会は、地上においてその敵らと抗争している者たちである（ローマ 8・17、Ⅱテモテ 2・12、4・8、エフェソ 6・12、13）。

3. この戦闘の教会は、目に見えない面と、目に見える面から考えられるべきである。目に見えない面というのは、彼らがキリストに対してもつ関係の点からで、神の霊と彼らの心の中の信仰とにより、キリストに結合されているため、頭に対する体としての面である。目に見える面というのは、個人的な、また各個教会における彼らの公的な信仰告白の点からである。その意味では、一つの、普遍的な、目に見える教会が存在することが承認されるであろう（Ⅱテモテ 2・19、黙示 2・17、Ⅰコリント 6・17、エフェソ 3・17、ローマ 1・8、Ⅰテサロニケ 1・8、イザヤ 2・2、Ⅰテモテ 6・12）。

4. 目に見える戦闘の教会の会員は、まだ教会秩序の中にいないか、福音の教会秩序に従って歩んでいるか、のいずれかとして考えられる。秩序において、従って全信者に共通の、霊的結合と交わり以外に、彼らは、更に、教会的・統制的な結合と交わりを享受する。その意味では、我らは、一つの普遍的な、目に見える教会を否定する（使徒 19・1、コロサイ 2・5、マタイ 18・17、Ⅰコリント 5・12）。

5. 目に見える戦闘の教会の会員が秩序をもつて歩んでいる状態は、家族の場合のように、所帯の (economical) 法の前か、国家の法の下か、のいずれかであったが、キリストの到来以降は、そうではなく、ただ会衆制の法だけである。（独立制という語を我らは支持しない。）それゆえに、国家的、地方的 (provincial) でも地区的 (classical) でもない（創世 18・19、出エジプト 19・6）。

6. 会衆制教会は、キリストの制定により、目に見える戦闘の教会の一部であり、聖なる契約により主イエス・キリス

トの交わりの内における、公的な神礼拝と互いの相互的建て上げのために、一つの体に結合された召された聖徒の一団から成る（Iコリント14・23、36、1・2、12・27、出エジプト19・5、6、申命29・1、9〜15、使徒2・42、Iコリント14・26）。

第3章 質と量の両方の点から目に見える教会の内容について

目に見える教会の内容は、召された聖徒である。聖徒によつて我々が理解するのは、

- 「1」単に宗教の原理について知識をもつていて、ひどい、公然たるスキヤンダルがないというだけでなく、彼らの信仰と悔い改めの公けの告白と共に、御言葉に対する非の打ちどころのない従順の内に歩む人々で、そういう人たちは、慈愛溢れる思慮で、召された聖徒に数えられる（多分その一部は内面的には不健全で、偽善者であるが）。なぜなら、そのような各個教会の会員は、普通は聖霊により聖徒、またキリストにある忠実な兄弟たちと呼ばれるからである。そして、いろいろな教会は、罪を犯し、スキヤンダルのある人たちを自分たちの間の交わりに受け入れ、その中に留まり続けさせたためにとがめられてきた。こうした手段により神の御名は冒瀆され、神の聖なるものは汚され、誤用され、敬虔な者らの心は悲しまされ、悪い者ら自身はかたくなにされて、一層裁きへと向かわれる。このような者らの例は、他の者の聖性を損う危険がある。わずかのパン種が、かたまり全体を膨らませるのである（エフェソ1・1、Iコリント5・12、13、黙示1・14、15、20、エゼキエル44・7、9、23・38、39、民数29・20、ハガイ2・13、14、Iコリント11・27、29、詩編37・21、Iコリント5・6）。
2. かかる人々の子供たちで、彼らも清い（Iコリント7・14）。
3. 教会の会員は秩序をもつて構成されてはいても、やがて退歩して、腐敗することがある。彼らは教会中でそうなつ

ているのを許されるべきではないが、しかし、規律と正しい譴責の執行の欠如により彼らが教会の中に留まっていることが、イスラエルの教会、およびガラテヤとコリント、ペルガモンとティアティラの教会において明らかやうに、教会の本質を直ちに消滅させるわけではない（エレミヤ2・21、Iコリント5・12、エレミヤ14、ガラテヤ5・4、IIコリント12・21、黙示2・14、15、21・21）。

4. 量の点から見た教会の内容は、都合よく一箇所に通常集まることができ以上の数の人になるべきではなく（Iコリント14・21）、また、教会の働きを都合よく継続できるよりも通常少なくなつてもならない（マタイ18・17）。その結果、聖書が、そこに一つの会衆しかない町あるいは市にいる、教会の存在に組み入れられた聖徒たちに言及するとき、テサロニケの教会、スミルナの教会、フィラデルフィア「の教会」、等々、その聖徒たちを普通、単数の教会と呼ぶ（ローマ16・1、Iテサロニケ1・1、黙示2・8、3・7）。しかし、そこに幾つもの集会がある一國あるいは一地方の聖徒たちについて語るとき、聖書は、しばしば、そして普通は、アジアの諸教会、ガラテヤの諸教会、マケドニアの諸教会、等々、複数で表した教会の名をもつて彼らと呼ぶ（Iコリント16・1、19、ガラテヤ1・2、IIコリント8・1、Iテサロニケ2・14）。このことは、それらの教会の幾つかについて、どのように集まり、一つの場所の教会全体として会していたか、個別的に記されているところから更に確認される。エルサレムにある教会、アンティオキアにある教会、コリントにある教会、そしてケンクレアにある教会、などである。ケンクレアの場合は、そこはコリントの港で、村に当たる所だったが、しかし、コリントとは別個の会衆で、コリント同じように自分自身の教会をもっていた（使徒2・46、5・12、6・2、14・27、15・38、Iコリント5・4、14・23、ローマ16・1）。

5. また、理性をもつてしては、以下のこと以外に考えられない。すなわち、キリストによつて任命され定められている教会は、自らのためにミニストリーが定められ任命されたということである。しかし、次のことは明らかであ

る。すなわち、各個の教会以外のためにキリストにより任命された通常の役員はいなかったということである。長老たちは、すべての群れではなく、聖霊が彼らをその監督者とされた特定の神の群れを養うために任命された（使徒20・28）のであるから、彼らはその群れ、しかもその群れ全体の世話をしなければならず、また、一つの会衆は通常の長老たちが世話ができる大きさであるから、それゆえ、通常一箇所に会することが出来る会衆よりも大きな教会は存在しない。

第4章 目に見える教会の形態について、また、教会契約について

[1] 召された聖徒たちは、自分たちの間で一つの目に見える、統治的結合をもたなければならぬ。さもなければ彼らは、まだ各個教会ではない。聖書が各個教会の本質を示すために用いているさまざまなたとえが示している通りである。例えば、一つの体、一つの建物あるいは家として、手、目、足、その他の部分は結ばれていなければならぬ。さもなければ個々バラバラのまま、一つの体ではない（1コリント12・27、1テモテ3・15、エフェソ2・22、1コリント12・15〜17）。石、木材は、四角にされ、切られ、磨かれてはいいても、組み合わされ、一体とされるまでは家ではない。同様に、慈愛による判断からすると聖徒あるいは信者であっても、秩序をもって一緒に結び合わされるのでなければ、教会ではない。

2. 各個教会は、それらの形態による以外に、お互いから区別できない。エフェソはスミルナではなく、ペルガモンはティアティラではなく、各々は、それ自体が別個の団体(society)で、それら自身の役員——他の教会の責任はもたなかった（黙示1）——、それら自身の美德——そのために他の教会が称賛されることはない——と、それら自身の腐敗——それらのために他の教会が非難されることはない——をもっている。

3. この形態とは、それによつて彼らが、同じ団体の中でキリストの諸規定を共に遵守するため自分たち自身を主に明け渡す「ことを約束する」、目に見える契約、合意、もしくは同意であり、これは普通、教会契約と呼ばれる（出エジプト19・5、8、申命29・12、13、ゼカリヤ11・14、9・11）。なぜなら、こうしなければ、どのようにして教員が教会の権能を相互にお互いに対してもちうるか、我らには分らないからである。

それぞれの各個教会を市や配偶者になぞらえることは（エフェソ2・19、IIコリント11・2）、単に何かある方式について言っているのではなく、その方式が契約の方法によるということを言っているように思われる。

その契約は、アブラハムの家族とイスラエルの子らを神に対して一つの教会と民にしたものであるだけでなく、異邦人信者の団体を今日における教会にするものである（創世17・7、申命29・12、13、エフェソ2・12、19）。

4. この自発的な合意、同意、もしくは契約（これらの語はここではすべて同義で用いる）は、明瞭かつ明白になればなるほど、より十分に我らに自分たちの相互的義務を思い起こさせ、それに向けて我らをかき立て、信仰告白者たちの一団という教会の存在の眞理性と、個々の人々の会員資格の眞理性を疑う余地をより少なくするのであるが、しかし、我らは、公的神礼拝と彼らの相互的建て上げのために、一つの集会に常に一緒に会する忠実な人々の一団の、眞の合意と同意がある場合には、その実質が守られていると考える。このような眞の合意と同意を彼らは、自分たちが公的神礼拝のために共に集うことを常に実践することにより、および、そこでの神の諸規程に宗教的にあずかることによつて、表わすのである。もし我らが、聖書の契約がどのようにに結ばれたかを考えれば、もつと手つ取り早い。すなわち、単に明瞭に口の言葉によつただけでなく、犠牲によつて、あるいは、肉筆および証印によつて、また、時々、文字や言葉の表現が全くなしに、沈黙の同意によつて、であつた（出エジプト19・5、8、24・3、17、ヨシュア24・18、24、詩50・5、ネヘミヤ9・38、10・1、創世17、申命29）。

5. 従つて、この方式は、相互的契約によるものであつて、心の中の信仰ではなく、その信仰の公の告白でも、近くに

6.

一緒に住んでいることでも、洗礼でもない、ということになる。すなわち、①心の中の信仰ではない。それは目に見えないからである。②単なる公の告白ではない。それは彼らがどこかの教会の会員であることを明確にはしないからである。③近くに一緒に住んでいることではない。無神論者や不信心な者も信者たちと一緒に住んでいることがある。④洗礼ではない。それは旧約の割礼同様、教会の存在を前提とするからである。割礼は教会を存在させたのではない。教会は割礼以前に、割礼なしで荒野において存在していた。さまざまなし^シるしは既に存在している契約を前提としている。一個人は洗礼の完結した一つの主体であるが、一個人が一教会であることは不可能である。

全信者は、神が彼らにそうする機会をお与えになるのに従い、一つの各個教会に加入することに努めるべきである。それは、模範を示し、制定してくださったイエス・キリストの榮譽の点から、福音の秩序と諸規定に対し、公に告白して承認し、従うことによつてなされる。また、それだけでなく、彼らの目に見える結合に基づいている、そして、教会の中にキリストが特別に御臨在くださる——そこから彼らはキリストと交わりをもち、彼にあつて互いと^レの交わりをもつ——という約束に含まれている、交わりの益の点からもなされる。更にまた、神の戒めの道に彼らを留め、さまざまに出た場合には（キリストの羊はすべて、この世においてはそうなる）、彼ら自身では戻ることができないので、彼らを取り戻すためであるが、それと共に、彼ら相互の建て上げの益と、契約の特権から切り離せないという、彼らの子孫の益（詩編119・176、Iペトロ2・25、エフェソ4・16、ヨハネ22・24、25、マタイ18・15〜17）のためでもある。

そうしなければ「信者が各個教会に加入しないと」、信者が罪を犯した場合、そのために備えられた救済策を欠いたままと^ルなる。そして、万一、全信者がすべての各個教会に加わるとい^テうこの義務を無視すれば、その結果、キリストは地上に政治^ポの仕組^リみ^テを持^カつた目^ルに見える教会を全くもたないことになるであらう。

第5章 教会権能の第一主体、すなわち、教会権能はだれに第一に属するか

〔1〕教会権能の第一主体は、至高の主体か、従属的で僕的な主体か、のいずれかである。至高の主体（父からの賜物として）は、主イエス・キリストである。僕的主体は、使徒、預言者、伝道者のように特別なものか、すべての各個教会のように通常のものか、のいずれかである（マタイ28・18、黙示3・7、イザヤ9・6、ヨハネ21・23、Iコリント14・32、テトス1・5、Iコリント5・12）。

2. 通常の教会権能は、長老職エラシヤに固有なような、職務オフィスの権能か、それとも、兄弟たちに属するような、特権の権能か、のいずれかである。後者は形式上兄弟たちの中にあり、直接キリストから由来する。従って、その権能は、秩序にのっとり、直接彼ら自身によつて活用あるいは行使されることができる。それに対して前者は、形式上、あるいは直接に、兄弟たちの中にはなく、従つて、直接兄弟たちによつて活用あるいは行使されることはできず、彼らが職務に任命する人々の中にあると言われ、その人々のみがこの権能を活用ないし行使するのである（ローマ12・4、8、使徒12・3、6・3、4、14・23、Iコリント12・29、30）。

第6章 教会の役員について、特に牧師と教師について

〔1〕教会は、神礼拝のため、契約により一緒に結び合わされた一団の人々であるため、それによつて、表面的には次のように見える。すなわち、使徒たちがどの教会にも長老を任職したと言われるとき（使徒14・23）、〔任職以前から〕教会の形態と内容の両方があるという意味だと取つて、役員なしでも教会の本質と存在はありうる、というよ

うにある。

2. しかしながら、役員は、教会が召集されるとき、教会がただ存在するだけということにとって絶対に欠かせないものではないが、しかし、通常は教会の召集のためには、そしてその繁栄のためには、役員が必要である。それゆえ、主イエスは、その優しい同情から、もし教会のために有益で必要でなかったならばなしていなかったであろう、役員を任命し、任職したもうた。更に、天に上げられたとき主イエスは、人々のために賜物を受け、それらの人々に与えたが、教会の役員はその少なからぬものを正當に与えられる。そこで彼らは、世の終わりまで、全聖徒を完成させるために継続するのである（ローマ 10・17、エレミヤ 3・15、1 コリント 12・28、詩編 68・19、エフェソ 4・8、11〜13）。

3. 役員は、特別なものか通常のものか、のいずれかである。特別なものは、使徒、預言者、伝道者などで、通常のもの、長老と執事などである（1 コリント 12・28、エフェソ 4・11、ガラテヤ 1、使徒 8・6、26、19、11・28、ローマ 11・7、8）。

使徒、預言者、伝道者は、キリストにより特別に召された者で（1 コリント 4・9）、彼らの職務は彼ら自身で終わる。そのためパウロは、教会の仕事をどのように進めるべきか指示するとき、使徒、預言者、あるいは伝道者の選出や方針については何の指図も与えず、ただ長老と執事についてだけであり、また、エフェソの教会と最後の別れをしようとしたとき、パウロは、教会を養う配慮を他のだれにでもなく、その教会の長老たちに託したのであった。同様の責任をペトロも長老たちに託している（1 テモテ 3・1、2、8〜13、テトス 1・5、使徒 20・17、28、1 ペトロ 5・1〜3）。

4. 長老たち（彼らは聖書では監督とも呼ばれている）の中で、ある者たちは、牧師と教師たちのように、主として御言葉のミニストリーに当たる。他の者は特に治会に当たり、そのため治会長老と呼ばれる（1 テモテ 3・2、フィ

リビ 1・1、使徒 20・17、28、I テモテ 5・17。

5. 牧師と教師の職務は、別々であるように見える。牧師の特別な仕事は、奨励に当たること、そしてそうするのに知恵の言葉を用いることである。これに対して教師は、教理に当たり、そしてそうするのに、知識の言葉を用いることである（エフエソ 4・11、ローマ 12・7、8、I コリント 12・8）。そして両者のいづれも、それを施すことに同じように召されている、あの契約のしるしを用いること、更にまた、譴責——これは御言葉の一種の適用にすぎない——を執行することに当たる。御言葉の説教は、その適用と共に、両者がそのうえ同様に責任を与えられているものである（II テモテ 4・1、2、テトス 1・9）。

6. 牧師と教師の両者は、キリストにより、聖徒たちの完成と彼の体の建て上げのために与えられているから、その聖徒たちとキリストの体は彼の教会である（エフエソ 4・11、12、1・22、23）。それゆえに我らは、牧師と教師は両方とも教会の役員であると考え。牧師は教会のため、教師はただ学校のため、とは考えない。もつとも我らは、次のことを喜んで認めるものである。すなわち、学校は合法的かつ有益で、やがて教会において牧師や教師の職務に召し出されるかもしれない人々を、優れた文学あるいは学問において訓練するのに欠かせないことである（I サムエル 10・12、19、20、列王下 2・3、15）。

第7章 治会長老と執事

〔1〕 治会長老の職務は、牧師、教師の職務とは別である。治会長老は牧師と教師を治会から排除するためにそう呼ばれるのではなく、治会と統治は、牧師と教師と共に治会長老に共通しているからである。それに対して御言葉を教え、説教することに当たるのは、牧師と教師に固有である（ローマ 12・7、9、I テモテ 5・17、I コリント 12・

28、ヘブライ13・17。

2. 治会長老の仕事は、牧師、教師にゆだねられている御言葉と聖礼典のミニストリーとは区別される霊的治会の行為に、牧師・教師と共にあずかることである（1テモテ5・17）。それに入るのは以下のようなものである。（1）次のようにして、神の家の戸を開け閉めすること。①教会によつて承認された教会員を入会させること。②教会により選ばれた役員の任職。③教会により拒絶された悪名高く、かたくなな罪人の除名。④教会により赦された、悔い改めた者の回復（歴下23・19、黙示21・12、1テモテ4・14、マタイ18・17、IIコリント2・7、8、使徒2・6）。
- （2）必要があるとき教会を召集し、適当なときに再び解散すること。（3）公のところで問題があまり面倒なく、より敏速に、終わりまで運ばれるように非公開で（in private）準備すること（使徒21・18、22、23）。（4）集まった教会において、すべての問題の取り扱いを次のようにして運ぶこと。①問題を教会に説明する。②発言と沈黙の頃合を整える。③教会の同意を得て、キリストの御旨にそつて結論を下す。（5）教会の運営と活動にかかわる一切の問題において、教会に対し案内役と指導者となること。（6）教会内のだれも、置かれた地位・立場から離れて無軌道に、すなわち、召命なしで、あるいは召命を受けているところで怠惰に、生活することがないように見守ること（使徒6・2、3、13・15、IIコリント8・10、ヘブライ13・7、17、IIテサロニケ2・10、12）。（7）教会を腐敗させかねない、生活上、あるいは教理上の過ちを予防し、いやすこと。（8）訓戒の言葉でもつて神の群れを養うこと。（9）そこへ派遣されるとき、病める兄弟たちを訪問し、そのために祈ること。（10）また、他のさまざまに適当な機会に、仕えること（使徒20・28、32、Iテサロニケ5・12、ヤコブ5・14、使徒20・20）。

3. 執事の職務は、主イエスにより、教会の中に制定されている。彼らは時々「助け手」と呼ばれる。

聖書は、執事がどのような人でなければならぬかを我らに告げる。すなわち、品位があり、二枚舌を使わず、大酒を飲まず、恥すべき利益をむさばらない人ということである。彼らはまず審査を受け、非難される点がなければ

ば、それから執事の職務に就かせられねばならない(使徒6・3、6、フィリピ1・1、1テモテ3・8、9、Iコリント12・28)。

執事の職務と仕事は、教会の献金、教会に与えられた贈り物を受け取り、教会の財産を管理すること、それと共に、教会が用意すべき食卓に仕えることである。教会が用意すべき食卓は、主の食卓、牧師の食卓、困窮している人々の食卓である。執事たちは、困窮している人々に実直に分配しなければならない(使徒4・35、6・2、3、ローマ12・8)。

4. このように、執事の職務は、教会の現世的なよき物についての配慮に限定されているので、御言葉、聖礼典、あるいはそのたぐいのもの、のような霊的なものに仕えたり、執行したりすることには広がらない(Iコリント7・17)。

5. 使徒「パウロ」の定めと教会の慣行は、聖徒たちの献金にふさわしいときとして、主日を推賞する(Iコリント16・1〜3)。

6. 教会の中にこれらすべての役員を制定することは、神御自身、主イエス・キリスト、聖霊の業である。それゆえに、神が任命なさらなかった役員は、教会の中に置かれたり、そこに留めておかれるのは全く不法であり、人間が造り出したもの、人間の単なる作品と任命したもので、自らの教会の王、自らの家の主であるキリスト・イエスの榮譽を大いに損う。教皇、総大司教、枢機卿、大司教、司教、大執事、宗教裁判所判事(Officia)、司教代理、そのたぐいのもの、いずれでもある。これらの人々、およびそうした階層制と従者たちの残りの人々は、主がお植えになったものではないから、すべて確実に根こそぎにされ、捨てられるべきである(マタイ15・13)。

7. 主は、病人を訪問したり、病人や同様のさまざまな困難の中にある人々を助けて、教会の中で貢献した年配の「やもめ」を定めている(そういう人たちがいる場合)(1テモテ5・9、10)。

第8章 教会役員の選挙について

〔1〕アロンがそうであつたように、神から召された者以外、だれも教会役員の榮譽を自分自身のものとすることはできない（マタイ15・13）。

2. 職務への召しは、キリスト御自身により直接的にか、教会により間接的にか、のいずれかである。前者は、使徒たちや預言者たちの召命で、この召命の方法は彼らで終わつた（ガラテヤ1・1、使徒14・23、6・3）。

3. だれであれ、役員として任職され、あるいは選ばれる前に、まず審査され、証明^{プルグ}されることが適當である。なぜなら、だれに対しても按手は性急にされるべきでなく、長老と執事の両者とも、正直で評判のよい人でなければならぬからである（1テモテ5・23、3・10、使徒16・2、6・3）。

4. 彼らが審査されるべきものは、選ばれてそのような立場に就く人々に聖書が求めている賜物と徳である。すなわち、長老は、非の打ちどころがなく、節制し、よく教えることができ、1テモテ3・2、テトス1・6〜9に記されているような、その他の資格を備えていなければならない。執事としてふさわしい人は、使徒6・3、1テモテ3・8〜11に指示されている人である。

5. 役員は、彼らが仕えることになる教会によつて招かれねばならない。この権能の保持は非常に重要なので、諸教会はそれを使徒たちの臨席の下行使した（使徒14・23、1・23、6・3〜5）。

6. 一教会は自由であるから、自由な選挙による以外にはいかなるものにも従順になることはできない。しかし、かかる人々がだれかを自分たちの上に立つように主にあつて選ぶとき、その場合には、彼らは従順にし、自分たちがそうして選んだ人々のミニストリーに、主にあつて、心から喜んで服するのである（ガラテヤ5・13、ヘブライ13・

17)。

7. そして、もし教会が自分たちの役員と牧師を選ぶ権能を有するとすれば、明らかに不適格と職務怠慢の場合には、教会はまた、彼らを解職する権能を有する。なぜなら、開き、閉じること、選び、拒むこと、職務に就け、職務から除くことは、同じ権能に属する行為だからである(ローマ16・17)。

8. 教会役員に対する審理^{トライアル}の際、更に、彼らを選んだ近隣の教会に相談し、彼らの援助を利用することが都合よくできる場合には、諸教会の安寧と交わりに大いに貢献すると我らは判断する。

9. かかる教会役員の選出は、この世の為政者や管区主教、あるいはパトロン「牧師推薦権保有者」に属するものではない。なぜなら、これらの人々やそのたぐいのいかなる人についても聖書は、その面で権能をもつとして語ることが全くないからである。

第9章 任職と按手について

〔1〕教会役員は教会によって選ばねばならないだけでなく、また、按手と祈りにより任職されねばならない。長老の任職の際には、祈りだけでなく、断食も一緒に加えられねばならない(使徒13・3、14・23、Iテモテ5・22)。

2. この任職は、一人の人を、選挙によりその人が既に権利を有していた教会における地位と職務に厳粛に就かせること以外の何ものでもなく、共和国において為政者を就任させることと同じようなものである、と我らは考える(民数8・10、使徒6・5、6、13・2、3)。

それゆえ任職は、選挙の前ではなく、後に行われるべきである(使徒6・5、6、14・23)。教会における通常の役員の外的召命の本質と実質は、彼の任職にあるのではなく、教会による彼の自発的で自由な選挙と、彼がその選

拳を受け入れることにあり、牧者と群れの間、すなわち、かかる牧師とかかる会衆の間の関係は、それらに基づいている。

任職は、役員を作るのでも、彼にその職務に不可欠のものを与えるのでもない。使徒たちは、人々による按手がなくとも長老だった。パウロとバルナバは、按手以前に役員だった(使徒13・3)。レビの子孫は、イスラエルの子らにより按手される以前に祭司であり、レビ人だった。

3. 長老たちがいる教会では、任職の際の按手は、それらの長老によつてなされるべきである(1テモテ4・14、使徒13・3、1テモテ5・22)。

4. 長老たちがいない教会では、そのために教会により秩序をもつて選ばれた兄弟たちの幾人かによつてなされてよい。なぜなら、もし会衆が、役員を選挙できるなら——選挙はより重要で、そこに職務の実質がある——、彼らは、はるかにもつと(場合と必要性が強く求めている)任職における按手——これは選挙ほどではなく、選挙の仕上がりである——をすることができ(民数8・10)。

5. しかしながら、指導的な者らがおらず、教会がそう願う場合には、他の教会の長老たちによつて按手がなされてはならない理由はない、と我らは思う。通常の役員たちが多くの教会の役員たちに按手した。例えば、エフェソ^{アレクサンドリア}の長老会は伝道者テモテに按手した。アンティオキアの長老会は、パウロとバルナバに按手した(1テモテ4・14、使徒13・3)。

6. 教会役員は、聖霊が彼らをそのための監督者とした一教会、しかもその各個教会、の役員である。長老たちが、すべての群れではなく、彼らの信仰と信頼にゆだねられており、彼らに依り頼んでいる群れを養うように命じられている通りである。また、もし牧師が一つの各個教会の牧師でなく、普遍的教会の牧師であれば、一つの各個教会に定住することは牧師にとつて必要ではありえなくなる。しかし、否、定住しないことはなお合法的でない。なぜな

ら、彼は、自分が牧師である教会の一部にだけ気を配ることはできず、群れ全体に気を配るように召されているのだからである（Ⅰペトロ5・2、使徒20・28）。

7. 自分が牧師であつた教会に対する職務上の關係を明らかに解かれた者は、役員と見なされることはできず、再び秩序をもつて職務に招かれるのでなければ、他のいかなる教会においても、職務上の行為を行うことはできない。彼が再び招かれる場合、それを妨げるものは何もないが、彼の任職の際、按手がまた彼に対して再度用いられるべきである、なぜなら、だからこそ使徒パウロは、少なくとも二度、使徒9・17、と13・3のところで、アナニアから按手を受けたからである「アナニアの按手は9・17のみ」。

第10章 教会の権能と教会の長老会について

- 〔1〕地上の全教会に対する至高の、主権的権能は、ただ、教会の王にしてその頭なるイエス・キリストに属する。彼は、その肩に統治を担い、天においても地においても、自らに与えられた全権能をもつておられる（詩編2・6、エフエソ1・21、22、イザヤ9・5、マタイ28・18）。

2. 公に告白した信者たちの一団は教会組織的に（ecclesiastically）同盟し、役員を有する以前に、また役員なしでも、教会となる。従つて、その状態においてさえ、キリストにより彼らに委任された、キリストの下での従属的教会権能は、さきに述べた仕方で（第5章2節）、彼らに属し、教会の本性と本質そのものに由来する。すなわち、自己自身の保持と存続のために十分な権能を備えられることは、あらゆる組織体に、従つて教会という組織体にも、当然である（使徒1・23、14・23、6・3、4、マタイ18・17、Ⅰコリント5・4、5）。

3. この教会統治は混合統治である（独立主義という用語が耳にされるずっと以前から、そのように認められている）。

教会の頭にして王なるキリストと、彼に内にあり、彼によつて行使される権能の点からは、君主制である。教会の体、あるいは兄弟たち、と彼らにキリストから与えられた権能の点からは、民主制に似ている。長老会と彼らにゆだねられた権能の点からは、貴族制である（黙示 3・7、I コリント 5・12、I テモテ 5・17）。

4. キリストに固有な主権的権能は、以下の場合に行使される。（1）教会を世から召し出し、御自身との清い交わりに入れるとき。（2）彼の礼拝の諸規定を制定し、それらの実施のために、彼の牧師たちと役員たちを任命するとき。（3）我らのすべての道と彼の家の道を整えるために法を与えるとき（ガラテヤ 1・4、黙示 5・8、9、マタイ 28・20、エフエソ 4・8、12、ヤコブ 4・12、イザヤ 33・22）。（4）彼の全制度と、それらにより彼の民とに、力と命を与えるとき。（5）彼らの平和のすべての敵に対し、また彼らから、彼の教会を守り、助け出すとき（I テモテ 3・15、II コリント 10・4、5、イザヤ 32・2、ルカ 1・51）。

5. 教会の体と兄弟たちにキリストから与えられた権能は、教会が以下の場合に行使する大権ないし特権である。（1）長老であれ執事であれ、彼ら自身の役員を選ぶとき（使徒 6・3、5、14・23、9・26）。（2）彼ら自身の全員を加えさせるとき。それゆえ、だれかを彼らの交わりから再び除く権能をもつとする大きな理由がある。その結果、過ちの場合、どの兄弟も、過ちを犯した兄弟を説得し、勧告する権能をもつ。彼の言うことを聞かない場合は、更に 1、2 の兄弟を得て勧告を続け、彼らの言うことも聞かない場合には、教会に告げる権能をもつ。彼の過ちが必要とするときは、教会全体が、勧告によるにしろ除名によるにしろ、彼に対して公的な譴責を行うことへと進む権能をもち、その人が悔い改めたときには、それに基づいて彼を以前の交わりに回復する権能をもつ（マタイ 18・15、17、テトス 3・10、コロサイ 4・17、II コリント 2・7、8）。

6. 長老がひどい過ちを犯した場合、問題は重大で、教会は、彼を職務に招く権能をもっていたのと同様に、秩序、得られる場合には秩序につながる他教会の助言、に従い、その長老を彼の職務から除く権能をもっている（コロサイ

4・17、ローマ16・17)。ただ一會員にすぎない人が、自分の罪にかたくなに留まる場合には、彼を自分たちの交わりの中に受け入れる権能をもっていた教会が、他のいかなる會員についてももっている、彼を追い出す同じ権能をももっている（マタイ18・17）。

7. 教会統治ないし治会^ルは、キリストにより、教会の役員たちに置かれている。それゆえに彼らは、神と共に治めるのであるが、治会者（rulers）と呼ばれる（Iテモテ5・17、ヘブライ13・17、Iテサロニケ5・12）。しかし、誤った運営の場合、彼らは、さきに述べられたところに従い、教会の権能に服する。聖霊は、教会の治会と教会統治に言及する場合、しばしば、というより常に、それを長老たちに帰している。それに対して、会衆の仕事と義務は、彼らの長老たちに従う、すなわち、主にあつて自分たち自身を彼らに服させる、という句で表されている。従つて、有機的あるいは完結した教会は、主にあつて治める人々と治められる人々とから成る、一つの政体（body politic）であることは明らかである（ローマ12・8、Iテモテ5・17、Iコリント12・28、29、ヘブライ13・7、17）。

8. キリストが長老たちにゆだねられた権能は、神の教会を養い、治め、何か重大なこの場合はしかるべく教会を召集するものである（使徒20・28、6・2、民数6・12、エゼキエル46・10、使徒13・15）。教会員たちは、そのように召集されたとき、正当な理由なく、行くのを拒むことはできない。また、来たときには、閉会になる前に離れてはならない。また、長老たちから許可を得る前に教会の中で発言したり、長老たちが沈黙を求めているときに発言を続けてはならない。また、十分な、重大な理由がないのに、長老たちの判断や結論に反対したり反駁してはならない。なぜなら、そのようなやり方は、秩序と統治に明らかに反し、騒ぎのきつかけとなり、混乱に陥りやすいからである（ホセア4・4）。

9. 役員や教会員が教会から受け入れられる前に、彼らを吟味することも、長老たちの責任である。すなわち、教会に寄せられた告発を受理すること、そして、教会が聴聞するためにそれらを整えることである。教会の前で過ちや他

の事柄を扱うに当たり長老たちは、そのことについて神の御旨と御心を明言し、公表する権能と、教会の同意を得て判決を公表する権能とを有する（黙示 2・2、I テモテ 5・19、使徒 21・18、22、23、I コリント 5・4、5）。最後に、長老たちは、会衆を解散させるとき、主の名によつて彼らを祝福する権能を有する（民数 6・23、26）。

10. 長老たちがもつこの統治の権能は、兄弟たちがもつ特権の権能をいささかも損わない。同様に、兄弟たちの特権の権能も、長老たちの統治の権能を損わず、両者は見事に互いに一致する。最大の教会権能を与えられていた使徒たちが、教会の運営については、兄弟たちの協力と同意を取りつけていた例に見る通りである（使徒 14・23、15・23、6・2、I コリント 5・4、II コリント 2・6、7）。また、聖書の II コリント 2・9 と 10・6 は、このような事柄について教会が行動し、行うことは、従順な思いで——しかも、ただ単に使徒たちの指示に対してだけでなく、彼らの通常の長老たちの指示に対しても（ヘブライ 13・17）——なすべきであった、と明言している。

11. 通常の統治権能は長老たちのみ属し、特権の権能は兄弟たちに留まっている（譴責にかかわる問題における判断の権能と、自由にかかわる問題における自由の権能のような）という前提から、有機的な教会と正しい運営においては、全教会行為は、混合運営の方法に沿つて行われ、いかなる教会行為も両者「長老たちと兄弟たち」の同意なしに完了あるいは完結されることはできない。

第11章 教会役員の扶養について

「1」使徒は、御言葉に仕える者たちに対し、必要かつ十分な扶養が当然であることを、自然と諸国の法から、モーセの律法、すなわち、その衡平法^{エライティ}から、また一般の理性の法則から、結論づけている（I コリント 9・9、15、マタイ 9・38、10・10、I テモテ 5・18）。更に聖書は、長老たちを働く者、働き人と呼ぶだけでなく、彼らについて語

るとき、働く者が報酬を受けるのは当然であると言ひ、また、御言葉を教へてもらう人は、教へてくれる人にすべてのよい物を分かつように求めており、福音を宣べ伝える人たちが福音によつて生活の資を得るべきことを、主の規定として言及し、脱穀している牛に口籠くろうをかけることを禁じている（ガラテヤ6・6、Iコリント9・9、14、Iテモテ5・18）。

2. この扶養を施しや自由な贈与としてでなく、不可欠の義務、払うべき負債として求めている聖書が引用される。義務、負債であるゆゑ、会衆は、他の命じられている義務や主の規定の場合と同様、この件では自分たちがよいと思うことをよいと思うときに、したりしなかつたり、自由だということではなく、彼らの間で御言葉によつて勞している人たちに肉のものをもつて仕えるべきで、それは、他のどんな働き人に対しても賃金を払い、彼らの他の負債を解き、満たすべきであるのと同様であり、また、他のいかなる主の規定も身を低くして遵守すべきである（ローマ15・27、Iコリント9・14）。

3. 使徒はガラテヤ6・6で、教へてもらう人は、教へてくれる人とすべてのよいものを分かち合うことを命じて、人が何を、どれだけどんな割合で与えるかを、自由裁量にまかせてはいない。何をというだけでなく、どれだけ、ということも、主によつて指示され、定められている（Iコリント16・2）。

4. 教会の会員だけでなく、御言葉を教へてもらう人はすべて、教へてくれる人とすべてのよいものを分かち合うべきである（ガラテヤ6・6）。会衆の献金が不足する場合には、執事は彼らに自分たちの義務を訴えるべきである（使徒6・3、4）。もし、彼らの訴えが十分でなければ、教会は自らの権能により教会員たちに義務の履行を求めるべきである。教会の権能が、人々の腐敗により、目的を達成しない、もしくは、できない場合は、推賞されているネヘミヤの例から明らかなように、為政者が、牧師ミニストリの働きに対してきちんと手当てされるように取り計らうべきである（ネヘミヤ13・11）。為政者は養父であり養母であつて、両方の板「十戒」の管理の責任を与えられている（イ

ザヤ49・23)。スキヤンダルが起こらないように予防するほうが、それが起こってから除くよりもよいし、また、より容易だからである。次のようになることが治会に最もふさわしい。すなわち、教会の配慮により、各人が、実行する前に、自分がどうすべきか、規則に従って自分の割合を知り、かくして、自分の判断と心が自分ができることに満足させられ、また、なされることに關して過ちがしつかりと予防されることである(Ⅱコリント8・13、14)。

第12章 教会への会員の加入について

〔1〕地上にあるキリストの教会の扉は、神の指示により、善くても悪くてもあらゆるたぐいの人々が、自分たちの思いのままにそこに自由に入れるように広く開かれておらず、そこに加入が認められる人々は、教会員として教会の団体に受け入れられるにふさわしく、適当であるか否かがまず試問され、調べられるべきである(歴下23・19、マタイ13・25、22・12)。エチオピアの宦官は、受け入れられる前に、真心からイエス・キリストを信じているかどうかフィリポにより試問された(使徒8・37)。エフェソの教会の天使は、自ら使徒と称して実はそうでない者どもを調べたことでほめられている。信者であると自ら公に告白している人々を調べるのは、同じ理由からである(黙示2・2、使徒9・26)。

役員たちは、教会の扉を管理する責任が負わされており、それゆえに、入ってくる人々の適格性を特別な仕方で調べなければならない。神殿の「一二の」門には、儀式的に汚れのある者が神殿に入らないように、一二人の天使が置かれている(黙示21・12、歴下23・19)。

2. 全教会員の内に見いだされる必要があるものは、罪の悔い改めとイエス・キリストへの信仰である(使徒2・38、42、8・37)。それゆえに、人々は教会に加入するに際し、これらのことについて試問されるべきであり、その後

彼らは、悔い改めと信仰を公に告白し、また、確かにあることを、理性的愛を満たす仕方、提示しなければならぬ。洗礼者ヨハネは、自分の罪を告白し、嘆き悲しむ人々は洗礼へと受け入れた。他の人々についてだが、人々は来て、自分たちの悪行をはっきり告白した、と言われている（マタイ 3・6、使徒 19・18）。

3. 教会への加入を認めてもらいたいと願っている人々の場合、最も弱い信仰も受け入れられるべきである（ローマ 14・1）。なぜなら、弱いキリスト者も、誠実であれば、教会員に必要とされる信仰と悔い改めと聖性の実質をもっており、そうした人ほど、彼らの確立と恵みにおける成長のための諸規定を最も必要とするからである。主イエスは、くすぶる灯心を消さず、傷ついた章を折ることなく、小羊たちを御腕をもつて集め、やさしくふところに抱いて運ばれる（マタイ 12・20、イザヤ 40・11）。最も弱いキリスト者も誠実であれば、排除されたり、心くじかれたりしない、そのような慈愛とやさしさが用いられねばならない。

4. もし、だれかが、過度の恐怖ないし他の弱さのため、公に自分たちの霊的な状態について個人的に話すことができなかったら、長老たちが非公開で聞いて納得してから、教会の前で公にそのことについて話し、教会がそれに同意を表明する、ということでも十分である。これは建て上げに非常に資する方法だからである。しかし、人がもつと能力がある場合には、ダビデが自分から公に告白しているように（詩編 66・16）、自分自身の口で、個人的に、自分の話と告白をすることが、最も都合がよい。

5. 個人的に公の告白をし、魂への神の働きかけの仕方について明言することは、合法的で都合がよいだけでなく、さまざまな点で、さまざまな根拠から、有益である。かの三〇〇人（使徒 2・37、41）は、使徒たちに受け入れられる前に、自分たちがペトロの説教で心を刺されたことを、罪から救い出されたいという熱心な願いと共に表明した。罪が今や彼らの良心をうずかせ、彼らは約束と奨励の言葉を受け入れる用意ができていたのである。我らは、我らに説明を要求するすべての人に対して、我らが抱いている希望について理由を説明する用意がなければならぬ。

い（1ペトロ3・15）。それゆえに我らは、自分の罪の悔い改め、真心からの信仰、有効召命について、どのような場合にも、明言し、説明することができ、そうする用意がなければならない。なぜなら、これらは、しっかりとした根拠のある希望の理由だからである（ヘブライ11・1、エフェソ1・18）。わたしは大いなる集会でああなたの義「英訳のまま」を隠しませんでした、と詩編40・11にある。

6. このような信仰と悔い改めの公の告白は、一度も教会という団体に属したことがなかった人々が加入の際にしなければならぬものであるが、同じようにして、以前どこか別の教会の会員だった人たちがそうするのを妨げるものは何もなく、彼らが今や会員として加わる教会は、それを合法的に求めることができる。自分たちの告白をしたかの三〇〇〇人（使徒2）は、以前はユダヤ人教会の会員だったし、ヨハネから洗礼を受けた人々も同様だった。教会は彼らを加入させるときに誤りを犯すことがあり、正規に加入を認められた人が過ちに陥ることもある（マタイ3・5、6、ガラテヤ2・4、1テモテ5・24）。そうではなく、もし教会がきちんと調べずに、自分たちの会員を無理に作り上げ、あるいは、教会員が自らを他の教会に押しつけるなら、事は非常に重大で、これによって教会の自由は、侵されるであろう。その人の交わりに対する適格性について、教会が満足していない人々を教会が吟味できないからである（雅歌8・8）。ふさわしくない人々を拒まずに受け入れるうちに、その自由が侵害されるだけでなく、そうした教会自身が、不可避免的に腐敗させられ、諸規定は汚されるであろう。これは、全教会は姉妹で、それゆえに平等である、という聖書の教えに矛盾する。

7. 同様の調べは、その教会の中で「信仰上」生まれ、あるいは会員資格を受けた人々、自分の親たちの契約のお蔭で幼児期ないし未成年期に洗礼を授けられた人々についてもなされねばならない。後者は、成長して判断力を備えた年令になったら、主の晩餐にあずかるものとされたいと願うようになるであろうが、聖なるものはふさわしくない者に与えられてはならないから、他の人々同様彼らも、その調べと吟味に臨み、主の晩餐に受け入れられる前に、

自分たちの信仰と悔い改めをその公開の告白により表明することが必要であり、そうしなければ、それにあずかるのを認められてはならない（マタイ7・6、Iコリント11・27）。

しかし、さきのように生まれ、また子供のときに受け入れられた教会員は、完全な交わり「主の晩餐を中心とした」にあずかるものとされるようになる前に、他の人たち（教会員でない）がもっていない多くの特権をもっている。すなわち、彼らは神との契約の中にあり、そのしるし、洗礼、を帯びており、従って、再生させられてはいないとしても、それでも、再生させる恵みと、契約およびしるし両方の霊的祝福すべてを得る、より希望をもてるどころにいる。彼らはまた、教会が見守っており、その結果、彼らのいやしと是正のために、必要に応じて、教会の叱責、勧告、譴責を受ける。

第13章 教会員、一教会から他教会への彼らの移動、推薦と退会の書簡

〔1〕教会員たちは、気が向くままに次々に教会を移ったり、あるいは離れたりしてはならず、正当で重大な理由がなければ、一緒に集会をもつことをやめてはならないと命じられているのであるから（ヘブライ10・25）、〔近くに〕一緒に生活し、住むべきである。そのような別離は体の解体と破壊につながる。建物から石や材木をはぎ取り、自然の体から肢体、臓器を切り取ったら、全体が壊れるのと同様である。

2. それゆえに、助言が得られるときと場合には、自分が会員である教会と移動について教会と相談し、教会の承認が得られたらそれを進め、そうでなければ断念することが、教会員の義務である。同意を得て加えられた人々は、そうするよう強制されるのでなければ、同意なしで離れるべきではない（箴言11・16）。

3. ある教会員の別離が明らかに危険で罪深いものであれば、教会はそれに同意しないでよい。なぜなら、同意を与え

るとすれば、彼らは信仰において行為しておらず、その人の罪にその人と一緒にあずかることになるからである。もし、疑問の余地が残る、その人が納得していない場合には、力づくでその人をとどめておくのではなく、問題を神にゆだねることが最善に思われる（ローマ 14・23、1 テモテ 5・22、使徒 21・14）。

4. ある教会員が教会から移動する正当な理由は、以下の通りである。①ある人が罪に加わることなしにとどまることができない場合（エフェソ 5・11）。②個人的な迫害の場合。それでパウロは、ダマスコの弟子たちから別れた。また、全員が散らされる全般的な迫害の場合（使徒 9・25、29、30、8・1）。

5. 清い交わりに対する軽蔑からか、強欲からか、教会にとってこの上ない悲しみだが、もつと大きくなりたいためか、分派主義からか、愛の欠如からか、何らかの不親切、あるいは教会にあると考えられただけの、あるいは実際にある、何らかの悪——柔和な心で大目に見られ、いやされることができし、そうされるべきもので、その悪について教会がまだ確信しておらず（多分その人自身は確信していても）、警告されてもいない——に関する争いの気持からか、教会から分離すること、つまり、以上のような、あるいは類似の種々の理由から、御言葉、あるいはしるし、あるいは譴責における、公的な交わりから退くことは、不法であり、罪深い。

6. 秩序のつとり住居を移した会員は、できるならば、彼らが住む所で、秩序をもった教会に加わるべきである。そうしなければ、彼らは教会員義務を果たすことも、教会員の特権を受けることもできない（イザヤ 56・8、使徒 9・26）。そのような例がだれかに許されれば、他の人たちを容易に腐敗させるし、万一多くの人が倣えば、聖書に反して、教会の解体と混乱の危険があるであろう（1 コリント 14・33）。

7. 秩序の上で、次のようにすることが必要である。すなわち、このようにして移動する教会員は、自分が加えてもらいたいと願っている教会に対して、まだ自分が会員である教会から退会承認状をもらうことである。相手の教会が欺かれないように、すなわち、その教会が彼を信仰において受け入れ、偽り者や偽兄弟たちを受け入れることによ

って腐敗させられないように、するためである（使徒18・27）。退会が認められた人は、別の教会に受け入れられるまでは、彼の退会承認状により、それまでの教会の会員であることをやめるわけではない。教会は、除名による以外には、教会員を教会員でなくすることはできない。

8. もしある教会員が、教会のあるところに一時的にだけ移るように召されたならば、諸規定と監督の点でその教会との交わりにあずかるのには、推薦状が必要であり、それがあれば十分である。ケンクレイアの教会の奉仕者であったファイベが、聖徒たちにふさわしく迎え入れられるように、自分のためにローマの教会あてに推薦状を書いてもらったようにである（ローマ16・1、2、Ⅱコリント3・1）。

9. そのような推薦状、退会承認状が、アポロのために、コロサイの人々にあててマルコのために、ローマの人々にあててファイベのために、また、諸教会にあてて他のさまざまな人々たちのために書かれた（使徒18・27、コロサイ4・10、ローマ16・1）。使徒は、ある人たちは、他の仕方では十分に知ってもらえないので、自分の側では必要がなくとも、そのような書状を特に必要としている、と告げる（Ⅱコリント3・1）。こうした書状の使用は、そのためにそれらが書かれた当事者たちにとって益であり、助けとなる。すなわち、その人が行き先の聖徒たちの間でスムーズに受け入れられ、その聖徒たちの方では、彼を受け入れるに際して正当な満足が得られるためである。

第14章 除名と他の譴責

[1] 教会の譴責は、以下の目的のために、キリストにより定められている。すなわち、教会における過ちを予防し、除き、いやすため、過ちを犯した兄弟たちを正し、取り戻すため、他の人たちを同じ過ちに陥らせないため、かたまり全体に悪影響を及ぼす恐れのあるパン種を一掃するため、キリストとキリストの教会の榮譽と福音の清い公的

告白を擁護するため、もし教会が、悪名高く、かたくなな罪人たちにより、神の契約とそのしるしが汚されるままにするようなことがあれば、彼らの上に正当にも下るであろう神の怒りを予防するため、である（Ⅰテモテ5・20、申命17・12、13、ユダ23、申命13・11、Ⅰコリント5・6、ローマ2・24、黙示2・14、16、20）。

2. もし過ちが私的（一人の兄弟が他の兄弟に対して過ちを犯す）であれば、過ちを犯した者は、被害者である彼の兄弟のところに行つて、その過ちに対する自分の悔い改めを表明すべきであり、そうされたら被害者の方は彼を赦すべきである（マタイ5・23、24、ルカ17・3、4）。しかし、もし過ちを犯した者がそうすることを無視あるいは拒否するなら、被害者である兄弟は行つて、彼ら自身の間で私的に、そのことについて相手に説得し、訓戒すべきである。もしそうして、過ちを犯した者が自分の過ちへの悔い改めに導かれるなら、訓戒した人は彼の兄弟を勝ち得たことになる。しかし、もし過ちを犯した者が彼の兄弟の言うことを聞き入れなければ、被害者である兄弟は、ほかに一、二の兄弟たちと一緒に連れて行くべきである。すべての言葉が、二人または三人の証人の口によつて確定されるようになるためである（過ちを犯した者がそれを受け入れれば訓戒の言葉となり、それを拒めば、不平の言葉ともなる）。なぜなら、もし彼がそれを拒めば、被害者である兄弟は、長老たちの口により教会に告げ、もし彼が教会の言うことを聞き入れて、過ちを悔いる告白により明言すれば、彼は回復され、勝ち得られたことになる。もし教会が彼が進んで聞きはするが、しかしまだ自分の過ちを確信していない、異端の場合のように、と分かれば、教会は彼に対して公的な訓戒を施すべきである。これは、過ちを犯した者が教会に対する公的な過ちを犯していることを明言するもので、これにより、罪を悔いる告白によつて彼の過ちが取り除かれるまで、主の晩餐の清い交わりを彼にひかえさせ、あるいは、保留にするのである。もし彼がなおかたくななままであれば、教会は除名によつて彼を追放すべきである（マタイ18・15、17、テトス3・10）。

3. しかし、過ちが初めからより公的で、より悪質で犯罪的な性質のもの、すなわち、本性の光によつて断罪されるよ

うなもの、であれば、その場合教会は、彼の罪を更に滅ぼし、主イエスの日に彼の魂がいやされるため、そのような段階的な手続きなしで、過ちを犯した者を彼らの清い交わりから追放すべきである（Ⅰコリント5・4、5、7）。

4. 過ちを犯した者を取り扱う際には、過度に厳しく、あるいは、厳格にならないように、また、反対に、あまりに手ぬるく、あるいは、だらしないならないように、十分な注意が払われなければならない。この際の我らの進め方は、我らもまた誘惑されないように（ガラテヤ6・1）、また、我らの最善の者も主から多くの赦しを必要としていることを自ら思い致しつつ、柔和な心でなされるべきである。しかし、過ちを犯した人の魂を勝ち取り、いやすことが、これらの努力の目的であるから、我らは、練られていないモルタルで塗ったり、我らの兄弟たちの傷を手軽にいやしたりしてはならない。ある人たちには同情し、他の人たちには恐れを覚えさせて、救わなければならない（マタイ18・34、35、6・14、15、エゼキエル13・10、エレミヤ6・14）。

5. 過ちを犯した人が除名されたままである間、教会は、自然的、家庭的、あるいは、市民的な関係が要求する以上には、霊的な事柄においてその人と教会員同様の交わりを一切慎むべきであり、また、市民的な事柄においても、彼との親しい交わりを一切慎むべきである。それゆえに教会は、彼が恥じ入るようになるため、彼と一緒に食べたり飲んだりすることも控えるべきである（マタイ18・17、Ⅰコリント5・11、Ⅱテサロニケ3・6、14）。

6. 除名は霊的罰であるから、除名された人を、その市民的権利において損つたり、彼からそれらの権利を奪うことはなく、それゆえ、彼らの市民的名誉あるいは權威の点で、君主あるいは他の為政者たちにかかわりはない。そして、除名された人は、ただ徴税人、異教徒とされるのであり、異教徒たちは教会の諸集會に御言葉を聞きに来ることが合法的に許されているのであるから、我らは、異邦人に許されている御言葉を聞く自由が除名された人々にも許されていることを認める。また、我らは、彼の回復を望まないわけではないので、彼を敵として考えるのではない

く、兄弟として彼を訓戒すべきである（Ⅱテサロニケ3・14、15）。

7. もし主が、その譴責を過ちを犯した人にとって清いものとなしたまい、その結果、キリストの恵みにより、自らの罪をへりくだって告白し、自らを裁き、神に栄光を帰して、彼が自分の悔い改めを表明するならば、そのとき教会は、彼を許し、彼を慰め、彼が以前彼らと共に享受していた平常の兄弟の交わりに彼を戻すべきである（Ⅱコリント2・7、8）。

8. 冒流的な、あるいはスキヤンダルとなる生き方をしている者らを交わりの中にい続けさせ、聖礼典にあずからせていることは、疑いもなく、それを直す権能を手に行っているのにそうしない人々の大いなる罪である（黙示2・14、15、20）。しかしながら、キリストと彼の弟子たちは彼らの当時、そして預言者たちと他の敬虔な人々は彼らの当時、主の命じておられたユダヤ教会の諸規定に合法的にあずかつていて、その教会の中にふさわしくない者たちが許されて入っていたからといってその教会からの分離を教えも実行もしなかったし（マタイ23・3、使徒3・1）、また、コリントの教会の信仰深い人々は、そこには多くのふさわしくない者たちと慣習があつたが、そのために聖礼典にあずからないようになどと決して命じられていないのであるから、それゆえ敬虔な人々は、同様の場合、直ぐに分離すべきではない。

9. 冒流的でスキヤンダルとなる生き方をしている人々が目に見られているような教会からの分離は、直ぐに必要なということではなく、同様に、その教会の会員が、他の点では立派であつても、聖礼典への参加においてそのような教会と交わることをそのような理由でやめることは不法である。なぜなら、無実の人が、自分がかかわつておらず、同意を与えてもいなかった他の人々の過失のゆえに罰せられるのは不合理だとすれば、他の人たちが、そうするのを許されるべきでないときに来るのを許されているという理由で、自分がそうすべきであるようにしるし「パンとぶどう酒」を祝福することにあずかるべく来ないことで、敬虔な人が義務を無視し、自らを罰するというのは、

一層不合理である。特に自分自身が彼らの罪にも、彼らが罪の中にありつつ規定「主の晩餐」に近づくことにも、更に彼らを遠ざけるべきなのにそうしない他の人々の怠慢にも同意せず、それどころか反対に、これらのことを心から悲しみ、他の人たちが自分の義務を果たすように控え目に、適当なときに励ましていることを考えれば、そうである（エブラ9・4）。もし教会が改革されえないならば、彼らは、第13章4節に詳しく述べられているように、彼らの自由を行使してよいのである。しかし、これらすべてを敬虔な人々が行う義務があり、各人は、ふさわしくない者が、この件がかかわっている教会により正当に訴えられるよう、自分の権能と立場に従い努力しなければならない。

第15章 諸教会相互の交わりについて

[1] 諸教会は、別個（distinct）であり、それゆえに互いに混同されることはできず、また、平等であり、それゆえに互いに対する支配権をもたないが、しかし全教会は、相互との教會的交わりを保つべきである。なぜなら、教会はすべて、単に神秘的な頭であるだけでなく、統治上の頭でもあるキリストに結合されており、そこから教会にふさわしい交わりが由来するからである（黙示1・4、雅歌8・8、ローマ16・16、1コリント16・19、使徒15・23、黙示2・1）。

2. 教会の交わりは、種々の仕方で実施される。

- (1) 互いに安寧を考えて相互に配慮する仕方です。
- (2) 我ら自身よりも彼らの方がもっとよく知っている人物や事柄について、他の教会の判断と助言を求める機会があるとき、相互の協議という仕方です。アンティオキアの教会が、異邦人の割礼の問題やそのような教理を持ち

出した偽教師たちについて、使徒たちや、エルサレムの教会の長老たちに相談したようにである（使徒15・2）。このような場合、いずれかの教会が自分たちの間に光あるいは平和を求めるとき、諸教会の長老や他の代表たちが共にシノッドに会し、疑問点、相違点について考え、議論し、真理と平和の道を見いだした場合には、それを関係のある諸教会に彼らの書簡と代表を通じて推奨することが、（御言葉にそつた）諸教会の交わりの仕方である（使徒15・6、22、23）。しかし、ある教会が彼ら自身の間で幾つにも割れたり、あるいは、公然たるスキャンダルの下にありながら、他の諸教会と相談することをなお拒むなら、それは、教会と兄弟たちの不和と傷を包んでやろうとせず（エゼキエル34・4）、憐れみと忠実さとのあまりの欠如を露にしているので、主イエスにとつても他の諸教会にとつても、まさしく侮辱（offence）である。それゆえに、そのような教会の状態は、兄弟としての交わりの更なる行為を実施するよう、すなわち、訓戒という形でするよう、諸教会に声高に訴えているのである。

（3）諸教会の交わりの第三の道は、訓戒によるものである。すなわち、ある教会に見いだされる何か公的な過ちがあり、その教会の人たちがそれに気付かないか、それを除き、いやす手段を用いる手続きを進めるのが遅い場合である。パウロは、ペトロに対して権威をもつていなかったが、しかし、ペトロがまっすぐ歩いていないのを見たとき、教会の人々の前で公にペトロを責めた（ガラテヤ2・11〜14）。諸教会は、一人の使徒が他の使徒に対して権威をもつていないように、互いの教会に対して権威をもつていない。しかし、一人の使徒が別の使徒を訓戒できたのと同じように、一つの教会も他の教会を、相手の権利を奪うことなく、訓戒できるのである。こうした場合、過ちを犯している教会が、訓戒した教会の言うことを聞き入れなければ、訓戒した教会は他の諸教会にその過ちについて知らせるべきである。すなわち、過ちを犯した教会が、自分たちに与えられた兄弟愛に満ちた訓戒を無視して、なおその過ちを犯しているままのときにはである（類比でマタイ18・15〜17）。こうした場

合、知らされた他の諸教会は、さきになされた訓戒を一致して支持すべきである。もし、過ちを犯している教会がなおかたくなで、悔い改めないままであれば、それらの諸教会はその教会との交わりを控えてよく、更に、その教会を説得するため、秩序正しく歩んでいる近隣諸教会のシノッドないしカウンシル（より大きな会議を都合よく開けなければ）の助けを用いることに進むべきである。もしその教会がシノッドの言うことを聞き入れなければ、シノッドはその教会をかたくなであると明言したあと、各個教会はシノッドの判断を支持し、受け入れて、それぞれ、その教会との断交の結論を明言すべきである。これに基づいて諸教会は、自分自身の交わりを純粹に保つ宗教的配慮から、その教会の人々と共に主の晩餐にあずかることや、通常であれば教会の交わりが許し、要請する清い交わりの他の行為から、正当に身を引くことができる。しかしながら、公的な過ちを犯しているかかる教会の会員が、その教会の過ちに同意せず、ふさわしい仕方では、その過ちに反対である証しを立てているなら、そういう人たちは、普段の交わりになお受け入れられるべきである。無実の人が過ちを犯している人々と一緒に罰せられるのは公平ではないからである（ガラテヤ18・25）。更にそれだけでなく、もしそのような無実の教会員たちが自分たち自身の教会の過ちを浄化するためにあらゆるよい手段を用いつつ相当の期間待った後、（近隣教会のカウンシルの許可を得て）最後に、自分たち自身の教会の交わりから身を引き、別の教会の交わりに参加するようになったならば、我らは、その別の教会が、あたかも無実の教会員たちが他の点でふさわしければ彼ら自身の教会から秩序に従って退会して自分たちのところに来たかのように、彼らを受け入れることは合法的であると判断する。

（4）諸教会の交わりの第四の道は、参加によるものである。すなわち、一つの教会の会員たちが折にふれて別の教会に行くときには、我らは、彼らが我らと共に主の食卓にあずかることを認める。なぜなら、主の食卓は、我らが、キリストとだけでなく、また、我ら自身の教会の会員とだけでなく、聖徒たちの全教会と交わりをもつ

ていることの証印^{シール}だからである（Ⅰコリント 12・13）。この点から我らは、もし、彼ら自身の牧師が不在であるか、あるいは、清い交わりのかかる実りが我らに要望されるならば、差し出された彼らの子供たちに洗礼を授けることを拒まない。同じようにして、一人より多くの牧師が備えられている教会は、別の教会の牧師が不在もしくは病気で欠けるとき、必要な期間、自分たち自身の牧師の一人を喜んでその代わりに当てる。

（5）教会の交わりの第五の道は、一つの教会のある教会員が別の教会に属する機会があるとき、推薦による道である（ローマ 16・1）。すなわち、もし、ある期間だけであれば、我らは推薦状により彼を、彼らの見守つてくれる交わりに託すが、彼がそこに住まいを落ちつかせるよう召されるならば、我らは彼の願いに従い、退会承認状により、彼らの契約の交わりに彼を託す（使徒 11・22、29、ローマ 13・26、27）。

（6）教会の交わりの第六の道は、必要な場合、互いに救済と援助を与えることである。有能な教会が役員を供給するとか、あるいは貧しい方の教会の欠乏に外的な支援をする、といったもので、異邦人の諸教会がエルサレムの貧しい聖徒たちに気前よく献金したような場合である（使徒 11・22、29、ローマ 13・26、27）。

3. 信者の一団が集まって教会の交わりを形成しようとするとき、彼らのより安全な進め方と、諸教会の交わりの維持のために、次のようにすることが欠かせない。すなわち、彼らは、福音の秩序「命令」に従って歩み、自分たちの意図を近隣の諸教会に知らせ、彼らの出席と助け、交わりの右の手を要望することである。そして近隣の教会は、彼らの進め方に反する正当な理由がない場合は、進んでそれらを彼らに与えるべきである（類比により、ガラテヤ 2・1、2、9）。

4. 以上のような幾つかの交わりの道以外に、教会を増やす道もある。すなわち、一つの教会が成長してあまりに大人数になったら、その教会は進んで移動し、彼ら自身の間で教会状態を形成すべく他の教会員と一緒に努める幾人かの役員を確保する教会員たちを送り出すことによってもう一つの教会を増やすのは、一つのやり方と、ふさわ

しい時期である。巣箱が一杯になりすぎたとき、蜜蜂が群れをなして巣別れして、他の巣箱に集めて入れられるように、キリストの教会も同じ必要性に基づいて同じようにし、その際、彼らが集まって一つの教会を形成することと、彼らの役員の任職の両方において、交わりの右手を差し出してよいのである（イザヤ40・20、雅歌8・8、9）。

第16章 シノッドについて

「1」秩序をもって集められ、使徒言行録15章の模範に従って正しく進められるシノッドを、我らは神の定めであり（使徒15・2〜15）、教会の存在にとつて絶対に必要であるということはないが、人々の邪惡と時代の倒錯から、教会における真理と平和の確立のため、教会の安寧にとつて必要であることを認める。

2. シノッドは靈的で教会的な會議であるから、それゆえに、靈的、教会的理由により構成される。キリストの下でのシノッドのそれらに次ぐ直接的な理由は、長老たちと他の代表たちを送り出す諸教会の権能である。それらの人々は、キリストの御名によつて共に会するが、彼らがシノッドの質料^{マツリ}である。彼らは、宗教上の問題を御言葉に従つて、議論し、討論し、決定し、それを関係する諸教会に公表することによつて、シノッドの本来的で正式の行為を行ふ。それは、諸教会において、誤謬と異端について確信させ、真理と平和を確立するためで、それがシノッドの目的である（使徒15・2、3、6、7〜23、31、16・4、15）。

3. 為政者は、諸教会に対して、宗教上の問題について自分たちに助言し、自分たちを助けるために、その長老と他の代表たちを派遣するよう呼びかけることによつて、シノッドを召集する権能をもつ（歴下29・4、5〜11）。しかし、シノッドを構成することは教会の行為であり、この世の為政者が教会と教会會議に対する敵対者であるときでさえ

も、諸教会によりなされてよい(使徒15)。

4. 信仰上の論争と良心の問題を討論し、裁定すること、清い神礼拝と教会のよい統治のために御言葉から清い方針を明らかにすること、各個教会における誤った教会運営と、教理あるいは習慣における腐敗に反対の証しを立てること、その改革のために方針を示すことが、シノッドとカウンシルに属する。しかし、規律という形で教会譴責を実施することや、何か他の、教会の権威ないし管轄権の行為は、それらに属さない。そういうものを、そのような監督の立場にあるシノッドは控えたのである(歴下29・6、7、使徒15・24、28、29)。

5. シノッドの方針と裁定は、御言葉に一致する限りで、敬意と服従をもって受け入れられねばならない。それは、それらが御言葉に一致しているという理由からだけでなく(これがその主要な根拠で、それなしではそれらは全く拘束力をもたない)、また、第二に、それらがなされた権能——これは神の言葉においてそうするように定められた、神の規定である——のゆえである(使徒15)。

6. 多数の教会が一つの場所に、例外なく教会員全員で一緒に集まることは困難であるから、アンティオキアの教会が全員でエルサレムに行かずに、その目的のため幾人か選ばれた人々が行ったように(使徒15・2)、諸教会は、その代議員あるいは代表により会することができる。諸教会の状態について知るのに、また、教会の益となる方法を助言するのに長老たちよりもっとふさわしい、あるいは、ふさわしくあるべき人はだれもないのであるから、教会は、そのような教会会議のために代表を選ぶに当たっては、そうした点に特別な注意を払うことがふさわしい。しかし、パウロとバルナバだけでなく、他の人たちも幾人かアンティオキアからエルサレムに行き(使徒15)、彼らがエルサレムに着くと、使徒たちと長老たちだけでなく、他の兄弟たちもその問題について集まり、会議を開いているから(使徒15・2、22、23)、従ってシノッドは、長老と、賜物を与えられており、教会から派遣された他の教会員たちの両方から成るべきで、諸教会のどの兄弟たちの出席も排除しない。

第17章 教会的事柄における国家的為政者の権能について

[1] キリスト者が集合して教会(church estate)を形成し、そこにおいて御言葉に従ってキリストの全規定を実施することは、合法的で、有益であり、必要である。それに対して為政者の同意が得られなくともである。使徒たちとその当時のキリスト者たちは、為政者全員がユダヤ教徒か異教徒で、大ていの場合、迫害を加える敵対者で、そうした事柄に対して支持や同意を与えようとはしなかったとき、しばしばそのように実践していたからである(使徒2・41、4、7、4・1〜3)。

2. 教会統治は、国家の市民的統治に対立するものでも、国家的為政者の権威を彼らの管轄権の点で侵害するものでも、また、いささかでも統治において彼らの手を弱めるものでもなく、むしろ、キリストの道に悪しき感情を抱いている者らが、王と君たちの好意をよそにそらすためにいかなることをしようとも、為政者たちを強め、国民に対しては為政者に一層心からの、良心的な従順をささげるように促す(ヨハネ18・36、使徒25・8)。あたかも、御自分の教会の中にあるキリストの御国が、為政者たちの統治——これもキリストのものである——を失墜させ弱めることなしには興隆し、立ちえないかのようにであるが、その逆が真実である。すなわち、それらは両者とも「キリストと国家的為政者」がそれらの別個の、正当な働きにおいて、一方が他方の助けとなりつつ、共に立ち、盛えることができる(イザヤ49・23)。

3. 為政者の権能と権威は、教会や他の善い業を抑制するためではなく、それらを助け、促すためである(ローマ13・4、1テモテ2・2)。それゆえ、為政者たちの同意と支持が得られる場合、それを軽蔑したり、軽く見てはならない。反対に、そこで彼らの同意と賛成を願い、要望することは、キリスト者である為政者にふさわしい榮譽の一

部である。為政者たちの同意と賛成が得られたなら、教会はそのとき、一段と多くの励ましと慰めを得て、自分たちの道を進むことができる。

4. 臣民に強制して教会員にならせ、主の食卓に着かせることは、為政者の権能に属さない。ふさわしくない者らを聖所に入れた祭司たちは、非難されているからである（エズラ 44・7、9）。そこで、それは祭司にとつて不法であつたように、国家的為政者によつてなされることも不法である。もし存在した場合に教会が追い出さなければならぬ人々を、為政者が教会の中に押し込んだり、そういう人々を教会の中に留め置いたりしてはならない。

5. 教会役員が、為政者のつるぎに干渉することが不法であるのと同様、為政者が教会役員に固有な業に干渉することは不法である。君主であるだけでなく預言者でもあつたモーセとダビデは特別であつたから、模倣はできない。そうした篡奪に対して主は、香をたこうとしていたウジアを重い皮膚病で打つて、反対であることを証しされた（マタイ 20・25、26、歴下 26・16、17）。

6. 宗教上の事柄に配慮し、第二の板に命じられている義務の遵守だけでなく、第一の板に命じられている義務の遵守のため自らの国家的「市民的」権威を用いることは、為政者の義務である。彼らは神々と呼ばれている（詩編 82・1）。為政者の職務の目的は、義と正直にかかわる問題だけでなく、敬虔、しかり全敬虔にかかわる問題における、臣下の平穩で平和な生活である（1テモテ 2・1、2）。モーセ、ヨシユア、ダビデ、ソロモン、アサ、ヨシヤファト、ヒゼキヤ、ヨシヤは、宗教上の問題において彼らの力を發揮したことに對し、聖靈により大いに推奨されている。反対に、この面ですくじつした王たちは、主によりしばしば責められ、非難されている。神の書「聖書」においては、ユダの王たちだけでなく、だれもキリストの予型タイプとは見なさなかつた（万一そうしても、何ら正当な反対の余地はなかつたが）ヨブ、ネヘミヤ、ニネベの王、ダレイオス、アルタクセルクセス、ネブカドネツアルは、この面で彼らの権威を行使したことに對し、推奨されている（列王上 15・14、22・43、列王下 12・3、14・4、15・35、

列王上 20・42、ヨブ 29・25、31・26、28、ネヘミヤ 13、ヨナ 3・7、エズラ 7、ダニエル 3・29。

7. 為政者の権能の対象は、不信、心のかたくなさ、表に出されていない誤った意見のような、全く内面的で、そのため、彼の目にとまり、認識するところとならないものではなくて、ただ、外なる人により行為されるものだけである。また為政者の権能は、人々の単なる作り事と方策にすぎないような、外なる人の行為を命じたり、それらの無視を罰することで行使されるべきでもなく（列王上 20・28、42）、御言葉において命じられ、禁じられている行為についてそうすべきである。しかし、御言葉が明瞭に——もつとも、為政者や他の人々の判断するところでは必ずしもいつも明瞭にはなくとも、しかし、それ自体においては明瞭に——裁定するものである。これらのことについて為政者は、しばしば実際にはそうしないとしても、当然の権利として、彼の権威を発揮すべきである。

8. 偶像礼拝、神聖冒瀆、異端、腐敗した、有害の意見の公表、土台のそうした破壊、説教された御言葉に対する公然たる軽蔑、主日を汚すこと、神礼拝と聖なるもの、そのたぐいのものの平和的な遂行と実施を妨害すること、は、国家的権威により抑制され、罰せられねばならない（申命 13、列王上 20・28、42、ダニエル 3・29、ゼカリヤ 13・3、ネヘミヤ 13・21、1テモテ 2・2、ローマ 13・4）。

9. もし、どの教会でも、一教会であれ多数であれ、御言葉の規則に反して、分派主義的になり、他の諸教会の交わりから自ら離れ、あるいは、自分たち自身の腐敗したやり方で矯正できぬほど、あるいは、かたくなに、歩むとすれば、そうした場合、為政者は、その問題が要請するのに従って、自分の強制的権能を発揮せねばならない。ヨルダン川のこちら側の部族は、他の諸部族が「証人の祭壇」を築いたことに対し、主に従うことに背を向けたのではと疑って戦争をしかけようとしたのだった（ヨシユア 22章）。